

塩江地区小・中学校建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

西地遺跡

塩江地区小・中学校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

西地遺跡

一〇一四年三月

高松市教育委員会

2014年3月

高松市教育委員会

塩江地区小・中学校建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

西 地 遺 跡

2014年3月

高松市教育委員会

例　言

- 1 本報告は、塩江地区小・中学校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（西地遺跡）の報告書である。
- 2 調査地は高松市塩江町安原上字西地に所在する。調査期間は平成24年3月27日～5月18日である。
- 3 本遺跡の試掘調査は、高松市教育委員会教育局文化財課（平成25年度より高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課に組織改変）文化財専門員山元敏裕が担当した。本調査および整理作業は同課埋蔵文化財担当職員池見涉および同課非常勤嘱託職員岡本治代（現徳島県立博物館学芸員）が担当した。
- 4 本書の執筆は池見・岡本が担当し、文責は文末に示した。本書の編集は池見が担当した。

第1表　調査・整理作業分担表

作業内容	実施期間	担当者
試掘調査	平成23年7月	山元
調査区の設定		岡本
重機掘削		岡本
遺構検出		岡本
本発掘調査	平成24年3月～ 平成24年5月	岡本 岡本 岡本 岡本 岡本 岡本 池見、岡本 池見、岡本
遺構掘削		
普及啓発活動		
全景写真・図面作成		
遺構面断ち割り・埋め戻し		
整理作業	平成25年4月～ 平成26年2月 <small>※一部平成24年度に実施</small>	池見、(岡本)

- 5 本調査にあたっては、高松市立塩江中学校の協力を得た。
- 6 本調査の基準杭打設は株式会社四航コンサルタントに業務委託した。
- 7 第3図および第4図は国土地理院2.5万分の1の地図をもとに作成し、一部改変した。
- 8 高度はすべて標高を表す。方位は座標北を示す。
- 9 遺構の略号は、溝：SD、土坑：SK、建物：SB、ピット（柱穴）：SPとし、それぞれに通し番号をつけている。また、建物を構成するピットについては、それぞれ建物名の後に通し番号をつけている（例：SB01-01）。
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	地理的・歴史的環境	5
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	6
第3章	調査の成果	11
第1節	調査区の設定/基本層序	11
第2節	遺構	11
第3節	遺物	25
第4章	総括	30
第1節	検出遺構について	30
第2節	考察	31
	遺物観察表	38

挿 図 目 次

第1図	塩江地区小・中学校建設事業に伴う試掘調査箇所	1
第2図	調査地位置図	5
第3図	西地遺跡の立地	5
第4図	周辺の道路	7
第5図	遺構平面図	12
第6図	遺構配置図	13
第7図	土層断面図	14
第8図	ベース土の変化	15
第9図	SD01 平面図・断面図	17
第10図	SD02・SD03 平面図・断面図	18
第11図	SB01 平面図・断面図	19
第12図	SB02 平面図・断面図	20
第13図	SK01・SK02・SK03・SK04・SK05 平面図・断面図	22
第14図	SP 平面図・断面図①	23
第15図	SP 平面図・断面図②	24
第16図	出土遺物	29
第17図	灌漑水路網整備状況（現在）	33
第18図	灌漑水路網整備状況（10世紀前葉～12世紀後葉）	34
第19図	灌漑水路網整備状況（13世紀前葉以降）	35
第20図	古代末～中世における区画溝敷設状況事例	37

挿表目次

第1表 調査・整理作業分担表	例言	第5表 主要遺構形成時期模式図	31
第2表 整理作業工程表	4	第6表 土器観察表	38
第3表 遺構名対照表	4	第7表 石器観察表	38
第4表 相対年代-絶対年代対照表	25	第8表 鉄器観察表	38

本文図版目次

写真1 調査前風景（南東から）	3
写真2 発掘体験の様子	3
写真3 現地説明会の様子	3
写真4 断ち割り調査	3

写真図版目次

写真図版卷頭-1 調査区全景（北から）	写真図版3-10 SBO1検出状況（西から）
写真図版1-2 調査地遠景（南から）	写真図版3-11 SBO2検出状況（南から）
写真図版1-3 調査地から阿謙山脈をのぞむ（北から）	写真図版4-12 SK01検出状況（北から）
写真図版2-4 SD01検出状況（南東から）	写真図版4-13 SK02検出状況（北から）
写真図版2-5 SD01壁a土層断面（南東から）	写真図版4-14 SK04検出状況（南から）
写真図版2-6 SD01焼土検出状況（南から）	写真図版4-15 SK05検出状況（南東から）
写真図版2-7 SD03検出状況（南から）	写真図版4-16 SB02-08断面（南から）
写真図版2-8 SD02検出状況（東から）	写真図版4-17 SPO7断面（南から）
写真図版2-9 SD02壁e土層断面（西から）	写真図版5-18 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

調査に至る経緯

塩江地区における過疎化・少子化等の社会的変化や学校施設の老朽化等を背景として、平成15年3月に「塩江町教育問題協議会」により提示された答申に基づき、塩江地区の小・中学校を統合し、現在の高松市立塩江中学校に新校舎を建設する計画が出された。当該地ではこれまで周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが、事業面積が広大であることから平成23年7月25～26日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下約20～30cmで遺構が確認されたため、新規に周知の埋蔵文化財包蔵地「西地跡遺」として埋蔵文化財包蔵地地図および台帳に登載することとなり、事業実施にあたっては事前に保護措置が必要となった。

平成24年3月23日付けで高松市長（担当：高松市教育委員会教育局総務課新設統合校整備室）より文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘通知が香川県教育委員会教育長あてに提出された。新校舎の基礎は現地表面から4.0mにおよぶため、この工事に伴い遺構面は破壊されるものと考えられた。そこで、平成24年3月27日付けで香川県教育委員会教育長より「発掘調査」を要する旨の通知を受け、事前に記録保存を図ることとなった。

試掘調査の概要

試掘調査では、事業予定地東側に南北方向の第1トレンチ、東側から中央部にかけて東西方向の第2トレンチを設定した（第1図）。

第1トレンチおよび第2トレンチ東端から西へ10mの範囲（図中①・②）については、現地表面から50cmまでは花崗土の盛土、それから2m下までは砂礫・砂を中心とする堆積層が認められ、トレンチ北端の最下層から近世以降と考えられる磁器の碗が出土したことから、新しい時期まで調査区東側を流れる香東川の氾濫原であったことが判明した。第2トレンチ東半部（図中③・④）は現地表面下約1mまでは花崗土による盛土で、その下に水田耕作土、さらに砂層の堆積を確認し、グランド造成前は水田、それ以前は第1トレンチと同様に氾濫原であったことが判明した。第2トレンチ西半部（図中⑤・⑥）では状況が異なり、現地表面下約30cmでぶい黄褐色シルト質細砂層を遺構面とする溝、柱穴、不定形遺構を確認した。第2トレンチ西端付近（図中⑦）では地表面から約20cmまで花崗土の盛土、その下には灰黄褐色砂礫層が認められた。こ



第1図 塩江地区小・中学校建設事業に伴う試掘調査箇所

の層はトレーンチ西端から東に8mの地点で遺構面であるにぶい黄褐色シルト質細砂層の下に続いている状況を確認したことから、本来の西側から続く傾斜した旧地形は学校建設時の造成で削られた可能性が高いと考えられる。

出土した遺物は細片のみのため時期の特定には至っていないが、中世前後に属するものであると考えられた（高松市教育委員会 2012）。（岡本）

参考文献

山元敏裕他 2012『高松市内遺跡発掘調査概報－平成23年度国庫補助事業一』高松市教育委員会

第2節 調査の経過

発掘作業の経過

発掘作業は平成24年3月27日～5月18日の日程で実施した。その間に文化財普及啓発活動として、発掘体験および現地説明会を実施している。発掘作業は以下の工程で実施した。

＜調査区の設定＞（3月26日）

先述のとおり、試掘調査においては第2トレーンチ中程から西端付近までは遺構面が確認できた。一方、第2トレーンチよりも西側では後世の削平が想定され、また第2トレーンチ東半部以東は氾濫原に該当することから遺構面は残存していないものと考えられた。したがって、新校舎建設予定地のうち第2トレーンチ西半部に相当する西辺23m・東辺34m・南辺24m・北辺26mの台形の区画を調査区とした（写真1）。

＜重機掘削＞（3月27日～3月29日）

調査区北西隅から掘削を開始した。現地表面より約20cm掘削した段階で、グラウンド造成土（花崗土）直下から平成23年度試掘調査時に2トレーンチ西端で検出した砂礫層を検出したため、この面を基準に掘削を進めた。遺構面は調査区北西隅が部分的に高くなっている、それ以外の部分では現地表面から約40cmの深さで遺構面を検出した。また部分的に高くなっている調査区北東部は、その東辺が擾乱によって削られている。

遺構面は場所によって違いがあり、調査区西端は砂礫層、中央は黄褐色シルト層が遺構面となっている。さらに、調査区東端はふたたび砂礫層となっており、平成23年度の試掘調査で明らかにされたとおり近世以降まで香東川の旧氾濫原であったと考えられる（第8図）。

この調査区東端の砂礫層部分にはすでに機能していないU字溝があり、その設置に伴い大規模に砂礫層上面が破壊されていた。また、先述のとおりこの部分は近世以降まで香東川の氾濫原であったことが確認されている。さらに、この砂礫層の堆積は深さ2m以上にわたっており、これを完全に除去すると調査区壁が崩落する危険性があった。これらのことから、調査区東端の掘削は、U字溝を除去して黄褐色シルト層に高さをそろえるにとどめた。

また、調査区北辺に沿うように下水管が埋設されており、その設置に際し遺構面が大きく削平を受けていることからこの部分に関しては完全には至っていない。このように、調査区北辺・東辺に一部未掘部分を残すものの、これらはいずれも後世に遺構面が削平された、あるいは地形的制約により遺構が形成されなかったと考えられる範囲に該当することから、調査対象地のうち遺構が残存する範囲については後述の作業過程を通してすべて記録保存を完了したとみなすことが可能である。

＜遺構検出＞（4月2日～4月5日）

検出作業は人力により行い、溝3条、掘立柱建物2棟、柱穴33基、土坑6基を確認した（第5図）。

＜遺構掘削＞（4月6日～5月8日）

溝は土層観察用畦沿いに断ち割りを入れ、土層を確認した上で層ごとに掘削を進めた。掘立柱

建物は柱筋にあわせてピットの外側半分を先に半裁し記録を取ったのちに完掘した。建物を復元できなかった単独のピットは、基本的には南側半分を先に半裁し、記録を取ったのちに完掘した。土坑は遺構中央付近に東西または南北方向の土層観察用畦を残して掘削し、土層堆積状況の記録を終えた上で完掘した。なお、遺構に伴い出土した遺物については、必要に応じて出土状況図を作成する等の方法により出土位置の平面（座標）および標高の情報を記録した上で取り上げを行った。

＜普及啓発活動＞（発掘体験 4月24日 / 現地説明会 4月30日）

塩江中学校生徒1年生～3年生86人を対象に、1学年45分ずつ発掘体験を行った（写真2）。掘削した遺構はSD01である。まず開始15分で遺跡の形成過程・発掘調査の方法・西地遺跡の発掘調査成果について説明した。その後、生徒5人に対し作業員1人を指導役として、30分間で遺構（SD01）の掘削を行った。そして最後に5分間の講評の時間を設け作業を終了した。

現地説明会においては、遺構の説明・出土遺物の展示を行った（写真3）。来場者数は130人であった。

＜全景写真・図面作成＞（5月11日～5月16日）

中学校校舎屋上等から完掘状況の全景写真および遺跡周辺部の状況を撮影するとともに、遺構の個別写真撮影を実施した。また、完掘後の平面図作成を手測りおよび測量機器を用いて実施した。

＜遺構面断ち割り・埋め戻し＞（5月17日～5月18日）

試掘調査において遺構の存在は確認されていたものの、遺構面の数は確認されていなかった。そこで、第1遺構面の調査が完了した段階で第2遺構面の有無を確認するため、調査区中央と南辺部で断ち割り調査を行った（写真4）。

調査区南辺のトレンチでは第1遺構面直下で礫層を検出した。当該トレンチの西端において部分的に3m程度掘削したが遺構は検出されず岩盤に達した。したがって、西地遺跡における遺構面は一面のみであると判断し、断ち割り断面図の記録を取った後に埋め戻しを行った。（岡本）



写真1 調査前風景(南東から)



写真2 発掘体験の様子



写真3 現地説明会の様子



写真4 断ち割り調査

整理作業の経過

整理作業は主に平成 25 年度に実施した。なお、出土遺物の洗浄 / 接合作業、選別作業、各種台帳作成、一部の報告書原稿執筆に関しては平成 24 年度中に実施済みである。

具体的には、平成 25 年 4 ~ 7 月に出土遺物の実測作業および拓本作業を行い、その後遺物実測図および遺構図のデジタルトレースを実施した。平成 25 年 10 月から報告書原稿執筆を本格的に開始するとともに編集作業を実施した。なお、出土遺物の写真撮影は平成 25 年 12 月に「西大寺フォト」に業務委託して実施した。(池見)

第2表 整理作業工程表

	平成25年										平成26年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
遺物実測/拓本													
遺物・遺構図トレース													
遺物写真撮影													
レイアウト													
原稿執筆													
編集													
印刷/刊行													

※ 出土遺物の洗浄/接合作業、出土遺物の選別作業、各種台帳作成、一部の報告書執筆について、平成24年度に実施済み。

第3表 遺構名対照表

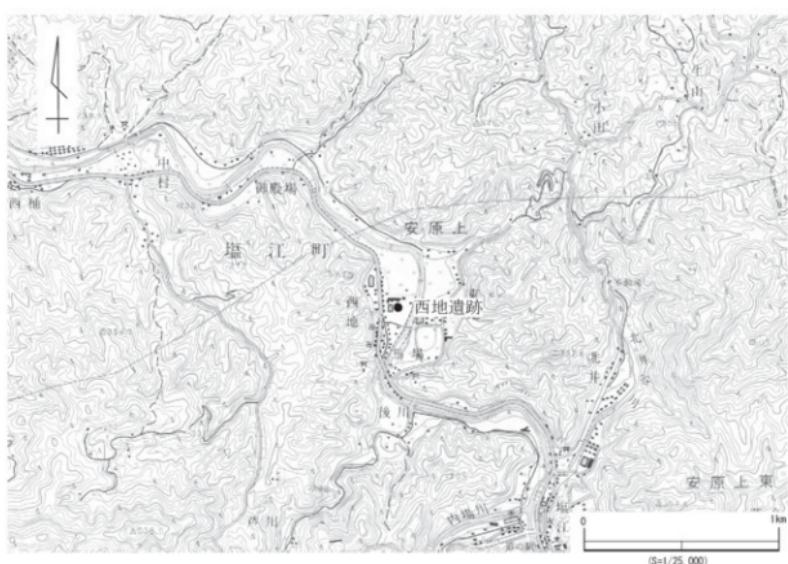
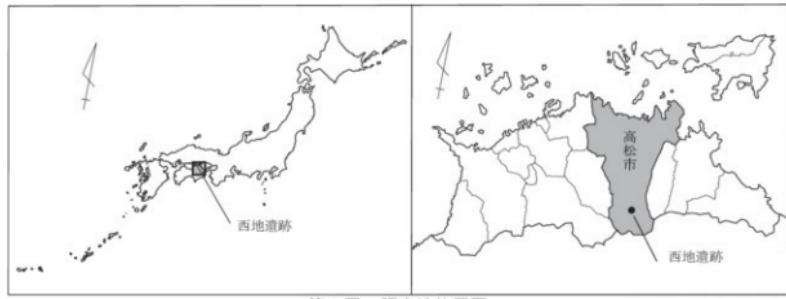
調査時	報告時
9	SB01-01
10	SB01-02
11	SB01-03
12	SB01-04
15	SB01-05
欠番	SB01-06
14	SB01-07
13	SB01-08
58	SB01-09
25	SB02-01
26	SB02-02
27	SB02-03
62	SB02-04
33	SB02-05
29	SB02-06
30	SB02-07
31	SB02-08
32	SB02-09
35	SB02-10
溝3	SD01
溝22	SD2
溝23	SD3
4	SK01
5	SK02
54	SK03
20	SK04
52	SK05
71	SK06

調査時	報告時
1	SP01
50	SP02
49	SP03
55	SP04
38	SP05
37	SP06
40	SP07
34	SP08
39	SP09
48	SP10
60	SP11
47	SP12
57	SP13
46	SP14
45	SP15
61	SP16
36	SP17
67	SP18
68	SP19
56	SP20
6	SP21
43	SP22
51	SP23
70	SP24
44	SP25
7	SP26
53	SP27
59	SP28
66	SP29
69	SP30
63	SP31
64	SP32

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

西地遺跡は香川県高松市塩江町安原上字西地に所在する。高松市は香川県の中央部に所在し、北側には高松平野、南側には阿讃山脈が連なっている。塩江町は高松市の南端に位置し、南限は徳島県と接している。阿讃山脈中に位置しており、峡谷型の地形である。また、塩江町の北半分は領家コンプレックスの花崗岩類、南半分は和泉層群の堆積岩で形成されており、その境界線が虹の滝・湯元温泉・内場・遊水林とほぼ町の中央を東西に走っている。



西地遺跡は塩江町のほぼ中央、領家コンプレックス上に位置している。町内を南東から北西に蛇行する香東川上流域西岸の河岸段丘面上に立地している。また、遺跡の西側には本遺跡が形成される段丘面より一段高い段丘面が存在し、高松平野から阿讃山脈を越えて徳島県へ通じる塩江街道（国道 193 号線）が整備されており阿波との交通の要衝に位置しているといえる。（岡本）

参考文献

塩江町史編纂委員会編 1996『新修 塩江町史』

太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編 2004『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会

第2節 歴史的環境

塩江町ではこれまで発掘調査が実施されていないため、周辺の遺跡の状況はあまりわかつていないが、弥生土器および土師質土器の散布状況や中世城館の存在が確認されており、近世には松平家の別荘が置かれたと伝えられている。

＜原始・古代＞

塩江町安原下高畠に所在する高畠遺跡では弥生土器が表採されている。『新修 塩江町史』によると、昭和 10 年（1935）の国道 193 号線改修工事の際に壺型土器 5 点と土師質の皿が 6 点出土したとされる（塩江町史編纂委員会 1996）。前者には底部が球形化した資料を含むことから少なくとも弥生時代後期後葉段階には当該地周辺部での土地利用が開始されたと言える。高松平野では、弥生時代中期中葉～後期前葉段階および後期後葉段階に丘陵部での土地利用が活発化するが、当該事例も一連の現象としてとらえられよう（池見 2012）。また、出土地は不明だが、安原下倉の下倉八幡神社では平形銅劍が神宝として所蔵されている（塩江町史編纂委員会 1996）。

＜中世＞

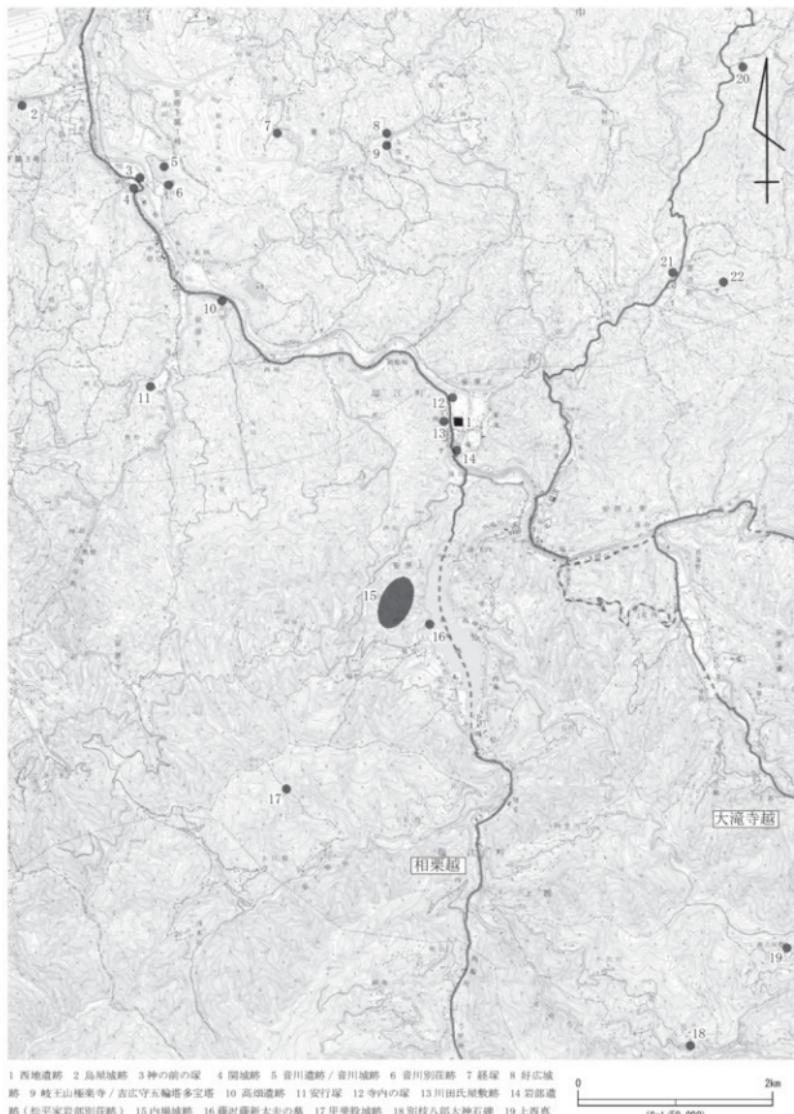
塩江町が位置する旧香川郡には、香川氏・香西氏・藤澤氏・由佐氏・川田氏らの居城と想定される城館が各所に築かれている。香川県教育委員会により平成 9～14 年度にかけて実施された分布調査の結果、音川城跡・閑城跡・岩部屋敷跡・内場城跡等の状況が明らかにされた（香川県教育委員会 2003）。その後、平成 24 年度に香川県教育委員会と高松市教育委員会により再度分布調査を実施し、複数の遺跡についてその範囲および内容に修正が加えられている。

鳥屋城跡（香川町安原下鶴瀧山）は、標高約 190 m の丘陵尾根上に所在する。北から入り込む谷筋を境に東西 2 箇所の主郭（西主郭・東主郭）が形成されており、曲輪や堅堀等の痕跡が現状で認められる。なお、西主郭は東西約 18 m・南北約 40 m、東主郭は東西約 21 m・南北約 65 m の規模を有する。『由佐家文書』に記載された内容から築城時期を推測することが可能であり、少なくとも 14 世紀後半には存在したと考えられる。また、近世に記された『由佐氏由緒臨本』では、鳥屋城が由佐氏の居城である由佐城の根城であったとされている。

音川城跡（塩江町安原下字音川）は、標高約 200 m の小山の丘陵先端に築かれている。塩江街道を見通す位置にあり、このために築かれたと考えられている。非常に小さい城だが、曲輪状地形や堅堀・横堀、土塁が確認できる。時期は不詳だが川田信濃守景信の居城とされている。

閑城跡（塩江町安原下字閑）は、香東川を挟んで音川城跡の南西の対岸、標高約 134 m の丘陵先端に築かれている。『古今讃岐名勝図絵』には、天正 7 年（1579）長宗我部元親が攻めてきた際、川田信濃守が守りとして閑を構えたと記されている。

川田氏屋敷跡（旧 岩部屋敷跡）（塩江町安原上字西地）は、塩江街道を挟んで西地遺跡の西側の丘陵裾部、標高約 185 m に所在する。平成 24 年度に実施した分布調査の結果、高さ 2 m 以上の規模を



第4図 周辺の遺跡

有する石垣の土留めにより形成された平坦地、および平坦地背後の高さ 1 m 弱の L 字形の土壘状施設、櫓台状施設、石組み井戸が確認されている。現状で残存する遺構は近世段階に形成されたものであると考えられるが、その原形は中世末までさかのほる可能性がある。『讃岐国名勝図会』によれば川田肥前守の居城とされており、天正 7 年 (1579) の築城とされる。一方、『讃陽古城記』には国弘右衛門の城とされている。

内場城跡（塩江町上西字城原）は、川田氏屋敷跡からさらに南に上った内場池の西側尾根上、標高約 450 m の地点に築かれている。『全讃史』・『讃岐国名勝図会』によれば藤澤氏、『安原記』によると川田氏が城主とされている。また、『日本城郭大系』によると藤澤氏は元暦年間の 1184 年、川田氏は嘉吉年間の 1441 ~ 1443 年にここを城としたとされる（平井 1979）。南北 700 m の範囲に曲輪や堀・土壘・虎口・土橋といった遺構が確認されている。

また、内場池にそそぐ貝ノ股川沿い、「平左屋敷」と呼ばれる緩い尾根先端の平坦地は甲斐股城（塩江町上西）の城跡と伝えられており、『全讃史』によると伊豆八郎信能が城主とされる。ただし、現状では城跡とすべき遺構は確認されていない。

大畠城跡（東植田町大畠 / 木田郡三木町朝倉字大畠）は、標高 216 m の丘陵尾根上に所在する。明確な堀取り溝等は確認されていないが、曲輪状の地形が現状で認められる。『全讃史』や『讃陽古城記』等によると、山田郡植田村を本拠地とした植田氏の配下にあった長谷川權正の居城であり、天正 10 年 (1582) に落城したとされる。

その他、大畠城跡南方の谷部に張り出した丘陵尾根上等には、中世城館である菅澤城跡（菅沢町）や尾尻谷番所跡（東植田町尾尻谷）が存在したとされる。しかしながら、平成 24 年度に実施した分布調査の結果、城館の存在を示す遺構は確認されなかった。

一方、『新修 塩江町史』によると高畠遺跡や音川地区では古墳時代の支脚や皿が出土したとされるが、その形状から中世の土師質足金の脚部および皿である可能性が高い（塩江町史編纂委員会 1996）。土師質足金は 13 世紀～16 世紀に広く使用された煮沸用土器であり、西地遺跡における遺構形成時期と同時期のものである。中世には、香東川上流域の西地遺跡が所在する河岸段丘以外の地域においても土地利用が開始されていた可能性が高い。

＜近世＞

寛永 19 年 (1642)，改易された生駒氏に変わって松平頼重が高松藩に就封した。以後、松平家は讃岐各所に別荘を築いており塩江にも 2 箇所の別荘を置いた。

音川別荘跡（安原下字音川）は、最明寺から北に約 100 m の一段高い平坦地に所在すると伝えられており、東西約 70 m、南北は西辺約 10 m、東辺約 30 m の地とされている。南には石垣があり、北方の山際に幅約 2 m・長さ約 15 m の堀が残っている。また、岩部別荘跡（安原上岩部）は岩部橋の東側にあつたと伝えられており、寛文 10 年 (1670) 前後に建てられたとされる（松平公益会 1964）。（岡本）

＜阿波一讃岐間の交通路＞

阿讃山脈により隔てられた阿波一讃岐間の交通路として、県内各所に複数の山越え道が整備された。これらの道路は、遅くとも近世には整備されていたことが、幕府により作成された『天保九年讃岐国絵図』（天保 9 年 (1838) をはじめとする絵図等の資料から読み取ることができる。高松平野においても例外ではなく、とりわけ主要河川である香東川および支流の内場川、樅川等の流水作用により形成された比較的規模の大きな谷地形を呈する塩江地区は阿波一讃岐間の交通の要衝としての位置を占め、高松平野と阿波地域をつなぐ主要道路「大滝寺越」「相栗越」が整備された。以下では、各主要道路の概要を示す。

大滝寺越（第 4 図 注 1） 讃岐と阿波を結ぶ主要交通路として、平安時代前期に「大滝寺越」が整備

された。「大滝寺越」は、県境に位置する大滝山山頂部に平安時代前期に建立されたとされる山岳寺院、大滝寺参拝用として讃岐・阿波の両方向から整備された山越え道であり、現在の高松市東植田町および木田郡三木町方面から塩江町桃川地区を経由し、大滝山山頂を経て徳島県美馬市脇町へとつながる。比較的急峻なルートではあるものの、物資流通および人的交流の軸となる交通路であったと考えられる。一例として、『全叢史』には16世紀末葉に阿波から「尾形八兵衛」が移住し、阿波国穴吹に鎮座する白人大明神の分社である白人神社を讃岐国塩江の桃川に勧請したことが記されている。

なお、「大滝寺越」は近世以降も主要道路として利用され続けたことが『天保九年讃岐国絵図』から読み取れ、推定される道路沿線には18世紀中葉～明治時代の石燈籠や石从、近代以降に設置されたと考えられる橋の痕跡等が複数残存している。また、沿線には前述の中世城館である大畠城跡が存在する。

相栗越（第4図 注2）「相栗越」は高松藩主松平家の菩提寺である法然寺（寛文10年（1670）再興）と城下をつなぐ「仏生山街道」の延長上に位置し、内場川をさかのぼり、相栗峠を経て現在の徳島県美馬市川原町へとつながる。近世の絵図等では「仏生山街道」と一体のものとして「安原往還」「安原往還道」等と称され、高松藩中央部における最も主要な阿波との交通路として位置付けられていた。実際、「相栗越」沿いでは18世紀中葉～明治時代に設置された石灯籠や石从等が數多く現存している（香川県教育委員会1991）。また、香東川と西谷川の合流点付近や西地遺跡南側の香東川と「相栗越」推定ルートとの交差地点等には、近代以降に設置されたと考えられる橋の橋脚基礎や欄干の一部が現存しており、引き続き現代に至るまで主要な交通路として利用され続けた状況を読み取ることが可能である。一方、「仏生山街道」整備以前の『讃岐国絵図』（寛永10年（1633））にも前身となる道路として描かれている。慶長9年（1604）に二代目高松藩主生駒一正により高松藩領内の道路整備事業が実施されたが、少なくとも当該事業により高松城下と高松藩領内を結ぶ道路の一部に組み込まれる以前には既に存在した可能性がある。

近世には「相栗越」を通した阿波地域との経済的・人的交流が活発であったとされる。実際、内場川東岸の河岸段丘上に位置する塩江町桧地区には、讃岐米と阿波藍が集積され交易の拠点であったとされる。また、農繁期における農作業や砂糖縮めに用いるための牛馬（借耕牛）を阿波国三好・美馬・麻植等から「相栗越」経由で高松平野へ移送したとされるが、これらの借耕牛を貸借する仲介業者（中追い）が西地遺跡の所在する岩部地域にいたとされる。「相栗越」沿いにはこれらの牛馬の墓が残されており、その銘文から遅くとも19世紀中頃には借耕牛の移送が「相栗越」を通して行われていたと考えられる。

前述のように「相栗越」は高松藩内における道路整備事業以前から存在した可能性が指摘できる。また、上記のような阿波との活発な経済的・人的交流ルートが近世に至り突如形成されたとは考えにくく、その前提として中世からの交流の存在が想定可能である。遅くとも15～16世紀には「相栗越」推定ルート沿線に閑城跡、川田氏屋敷跡、内場城跡等複数の中世城館が築かれていたが、このことからは「相栗越」推定ルートである谷筋を統治・軍事・経済活動上重要視する傾向を読み取ることが可能であり、少なくとも中世後半には既に主要な交通路として整備されていた可能性を指摘できる。前述の「大滝寺越」は比較的急峻であり、実際『讃岐一円図』（天保5年（1834）写）にも「牛馬不通」と記されている。中世には山間部での土地利用が進み、阿波との交流がより活発化したと考えられるが、これらの事情を背景として、より円滑に通行可能なルートとして「相栗越」が整備されたと考えられる。しかしながら、中世の状況を示す絵図等は現存せず、また道路沿線に中世の石造物等も存在しないことから現段階では可能性としてとどめざるを得ない。（池見）

注1)「大滝寺越」推定ルートは、『天保九年讃岐国絵図』および『高松領八郡図』をもとに、現状で認められる道路、地形、石造物の位置等を勘案して近世段階の状況を図示した。

注2)「相栗越」推定ルートは香川県教育委員会により平成2年度に実施された香川県歴史の道調査事業の調査成果（香川県教育委員会 1991）に基づき、近世の状況を図示した。

参考文献

- 池見 渉 2012「社会環境・周辺集落の動態」『都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊 北山浦 道跡』高松市教育委員会
- 唐木裕志・橋詰 茂編 2005『中世の讃岐』美巧社
- 香川県教育委員会編 2003『香川県中世城館詳細分布調査報告』
- 塩江町史編纂委員会編 1996『新修 塩江町史』
- 瀬戸内海歴史民俗資料館編 1991『香川県歴史の道調査報告第4集 仏生山「街道」（赤坂往還・安原往還・相栗越）調査報告書』
- 香川県編 1989『香川県史 第4巻 通史編 近世II』四国新聞社
- 平井 聰 1979『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』新人物往来社
- 松平公益会編 1964『高松藩祖 松平頼重傳』

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定 / 基本層序

調査区の設定

第1章で述べたように新校舎建設によって遺構が破壊されると考えられる西辺 23 m・東辺 34 m・南北 24 m・北辺 26 m の台形の区画を調査区とした。

基本層序

上層から、I層：花崗土・II層：旧耕作土・III層：黄褐色シルト・IV層：砂礫層の4層に大別できる（第7図）。現地表面から 10～15 cm は I 層：花崗土の盛土、その下 30cm は II 層：旧耕作土である。この旧耕作土の直下が遺構面となっている。南壁土層図作成箇所東端部から西へ 11.7 m までは III 層：黄褐色シルト層が遺構面になっている。それより西側ではこの黄褐色シルト層は西に向かって傾斜していき徐々に薄くなり、同東端部から西に 14.7 m の地点で消滅している。なお、この黄褐色シルト層は土器片を含んでおり、胎土や焼成をみると縄文もしくは弥生時代のものと考えられることから、この層は縄文時代以降に形成されたと考えられる（「第3節 遺物」参照）。

南壁土層図作成箇所東端部から西に 11.7～16.2 m までは、旧耕作土と黄褐色シルト層との間にオーダー ブラックのシルトブロックを含む砂礫層が堆積しており、この面が遺構面となっている（III' 層）。この砂礫層は、礫やシルト層がブロック状に混在しているため、この部分は西地遺跡形成の際に人工的に窪地を埋め、平坦面を作り出した可能性がある。ただし、自然堆積によって形成された可能性も否定できないため、どちらであるかは判断できていない。

III 層：黄褐色シルト層の下には、IV 層：砂礫層が堆積している。この層は礫の含有量によって 2 層に分けられる。上層は大礫を 5%・巨礫を 3%、下層は大礫を 3%・巨礫を 15% 含んでいる。上層は東から西に向かって堆積が厚くなり、調査区西辺から東に少なくとも 0.4 m まではこの面が遺構面となっている。下層は厚さ最大 1.4 m にわたり堆積しており、その下は花崗岩の岩盤である。

このように、III 層：黄褐色シルト層・IV 層：砂礫層はそれぞれ西と東に傾斜しており、香東川が流路を変えながら西地遺跡の立地する平坦面を形成してきたことを示唆する。（岡本）

第2節 遺構

本調査において、溝 3 条・掘立柱建物 2 棟・柱穴 33 基・土坑 6 基を検出した。以下、遺構ごとに詳細を記述する。

<SD01>（第9図）

調査区北中央から南東隅に向かって湾曲しながら流れる幅最大 2.8 m、長さ 18.5 m の溝である。溝の北端および南端は擾乱によって壊されているが、本来は調査区外にも南北方向に伸びていたものと考えられる。断面形態は V 字状を呈しており、調査区北端から南に 13 m までは底部が一段深くなっている。溝底部は調査区南端で遺構面から 34cm（標高 177.44 m）、調査区北端で遺構面から 70cm（標高 176.96 m）と、南から北へ傾斜している。

埋土は褐色粗粒砂層（I層）と暗褐色シルト層（II層）の2層に大別でき、他よりも一段低くなっている調査区北端から南に 13 m まではこの下に褐色粘質土層（III層）が堆積している。

I 層は均一な砂層であり、洪水等で短期間に埋没したものと考えられる。12世紀第3四半期～第4四半期の土師質甕口縁部が出土している（第16図-17）。

II 層は後述する III 層を掘削した部分に堆積した暗褐色シルト層である。II 層は比較的多くの遺物を含



第5図 遺構平面図



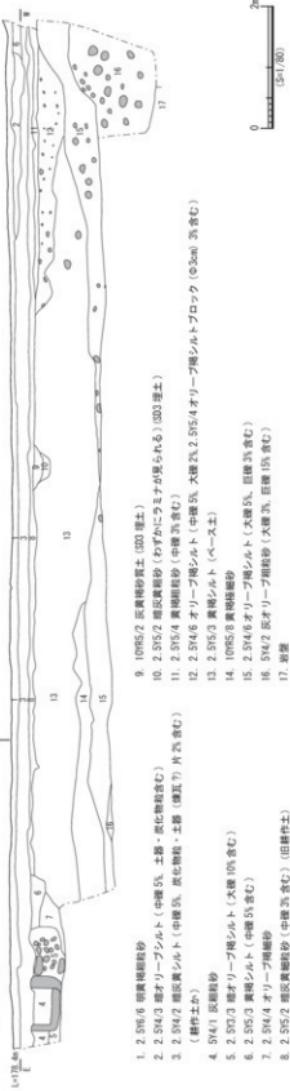
第6図 遺構配置図

西壁土層



1. 2.5% 有機質腐植物質層 1層に対応
2. 2.5% 有機質腐植物質層 (中層 25% 合土) (底耕作土)
3. 2.5% オリーブ樹シルト (中層 15% 合土)
4. 2.5% 有機質腐植物質層 (中層 5% 腐化物質・土器・焼瓦等) 片化食土 (底耕作土)
5. 2.5% 有機質腐植物質層 (中層 25% 合土) (底耕作土) ⇒ 塵壁 8 層に相当
6. 10% 有機質腐植物質層 (中層 25% 合土) (底耕作土) ⇒ 地山山ロック 15% 合土 (SPT2 硬土)
7. 10% 有機質腐植物質層 (小層 1% 地山山ロック 15% 合土) (SPT1 混土)
8. 2.5% 有機質腐植物質層 (中層 35% 合土) ⇒ 塘壁 11 層に相当
9. 2.5% 黄褐色シルト (中耕作土、大耕作 15% 中耕 7% 合土) (ベース土) ⇒ 塘壁 15 層に相当

南壁土層



第 7 図 土層断面図



第8図 ベース土の変化

んでおり、土師質壺底部（第16図-1・2・5・7～9）・土師質甕もしくは羽釜の口縁部（第16図-13）・須恵器甕体部（第16図-16）・須恵器壺底部（第16図-4）等が出土している。これらのうち、最も新しい遺物は10世紀末葉に属するものである。

Ⅲ層は調査区北端から南に13mまでの他より一段深くなっている部分で確認した。地山ブロックや焼土ブロック・炭化物を多く含んでおり、人工的に埋められたものと考えられる（第9図 畦a-a'、b-b'）。SD01に隣接して焼土・炭を多く含んだ不定形土坑（SK04・05）があることから、溝の焼土や炭化物はこの土坑に由来する可能性が高い。最下層は褐色粘質土層であり、10世紀前半の土師質壺底部が出土している（第16図-10）。SD01形成直後の堆積層であると考えられる。

以上のことから、SD01は10世紀前半以前の時期に開削され（Ⅲ層）、一旦掘りくぼめて改変された後に10世紀末には浅く埋められ（Ⅱ層）、12世紀第3四半期～第4四半期には自然堆積（I層）によって埋没したと言える。また、SD01の埋土を切ってSD02が開削されているため、SD01の廃絶時期はSD02が開削されるよりも古い段階であると言える。

<SD02・SD03>（第10図）

SD02はL字に屈曲する溝で、調査区中央で南北溝SD03とT字に交わっている。SD02・03はいずれも幅50～80cm・深さ30cm以下であり、断面形状はU字型を呈する。SD02の底部の標高は177.8m前後であり、東西での高低差はないが、調査区東端に香東川の氾濫原が広がっていることから、西から流れてきた水を東の香東川に排水していたものと考えられる。また、SD03の底部の標高は177.9m前後であり、こちらも南北の高低差は少ない。

次に埋土を見てみると、SD02埋土はI層：黄褐色極細粒砂（小礫を多量に含む）・II層：灰黄褐色シルト（地山ブロック20%含む）に、SD03埋土はI層：にぶい黄褐色細粒砂（小礫をわずかに含む）・II層：灰黄褐色シルト（地山ブロック10%含む）に分けることができる。SD02・SD03の埋土はどちらもほぼ水平に堆積しており、溝底部には鉄分が沈着していた。したがって水流はあまりなく、滞留状態であったものと考えられる。先述のとおり溝底部の高さは東西・南北でほとんど差がない、このことも水が滞留状態であったことを裏付けている。また、SD02・03の結合部である畦eの断面を見ると、SD02の埋土がSD03の埋土を切っており、SD03を埋めた後もSD02は機能していたことがわかる。なお、SD02・03結合部には長径45cm程度の砂岩円礫が据えられており、当該結合部を封鎖するような状況を呈する。

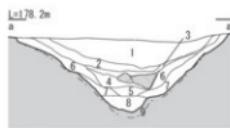
遺物の出土量は少ないがSD03埋没後に形成されたSP04から14世紀前葉前後および15世紀中葉～16世紀前葉の遺物が出土していることから、SD03は当該期までには既に埋没していたと考えられる（第16図-23・24）。一方、SD02からは13～16世紀の足金（第16図-18・19）とともに、下層から江戸時代の磁器が出土しているため、13世紀前後に掘削され少なくとも江戸時代以降の時期に埋没したと言える。

以上のことから、SD02・03はSD01が埋没した12世紀第3四半期～第4四半期以降の時期に開削されたものと考えられる。その後、SD03は15世紀中葉～16世紀前葉までは埋没し、SD02のみが使用されるが、江戸時代以降の時期になるとSD02も埋没したものと考えられる。

<SB01>（第11図）

調査区西寄りに位置する1間×3間の掘立柱建物である。柱筋は座標北から東に約6度ふれている。柱間寸法について、南北方向は南2間分が約2.3m、北1間分が約3.3mであり、東西方向は約1.9mである。柱穴の大きさは直径28～36cm、深さ15～30cmである。建物を構成する柱穴内の埋土をみると、SB01-01だけは柱痕を確認できるが、それ以外は柱痕や柱抜取穴を確認できるものはなく上下2層の構造になっている。

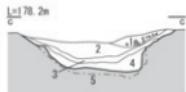
遺物はSB01-09から土師質の土器片や用途不明鉄製品が出土しているが、時期の特定は困難である。



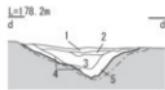
1. 2. 514/4 オリーブ鉱粗砂 (2より粒径大)
(下層にいくにつれて粒径が細くなる) I層
2. 514/4 オリーブ鉱粗砂 (1より粒径小) II層
3. 101K3/4 黄銅シルト (2層が若干混じる) III層
4. 101K3/3 墓地粘土 (炭化物を少量含む) IV層
5. 101K5/2 黄銅鉱粘土 (炭化物を少量含む) V層
6. 2. 514/4 オリーブ鉱粘土 VI層
7. 2. 514/4 オリーブ鉱シルト～粘土 VII層
8. 101K5/3 に富む黄銅粘土 (炭化物を少量含む) VIII層
9. 2. 514/6 オリーブ鉱粘土 (ベース)



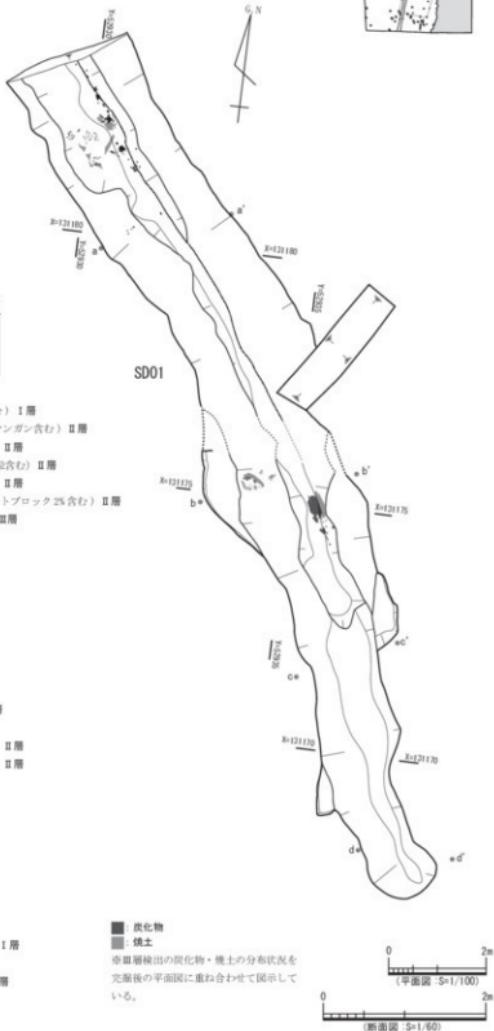
1. 2. 515/3 黄銅粗砂 I層
2. 514/3 オリーブ鉱粗砂 (101B6/3 に富む黄鉱含む) II層
3. 2. 515/4 黄銅シルト (101B6/3 に富む黄鉱含む, マンガン含む) III層
4. 101K4/6 オリーブ鉱シルト (地山ブロック 2%含む) IV層
5. 101K4/3 に富む黄銅シルト (マンガン含む, 炭化物含む) V層
6. 101K4/2 に富む黄銅シルト (地山ブロック 2%含む) VI層
7. 2. 514/4 オリーブ鉱シルト (101K1/3 に富む黄銅シルトブロック 2%含む) VII層
8. 2. 514/4 オリーブ鉱シルト (土器・炭化物含む) VIII層
9. 2. 515/4 黄銅粗砂 (ベース)



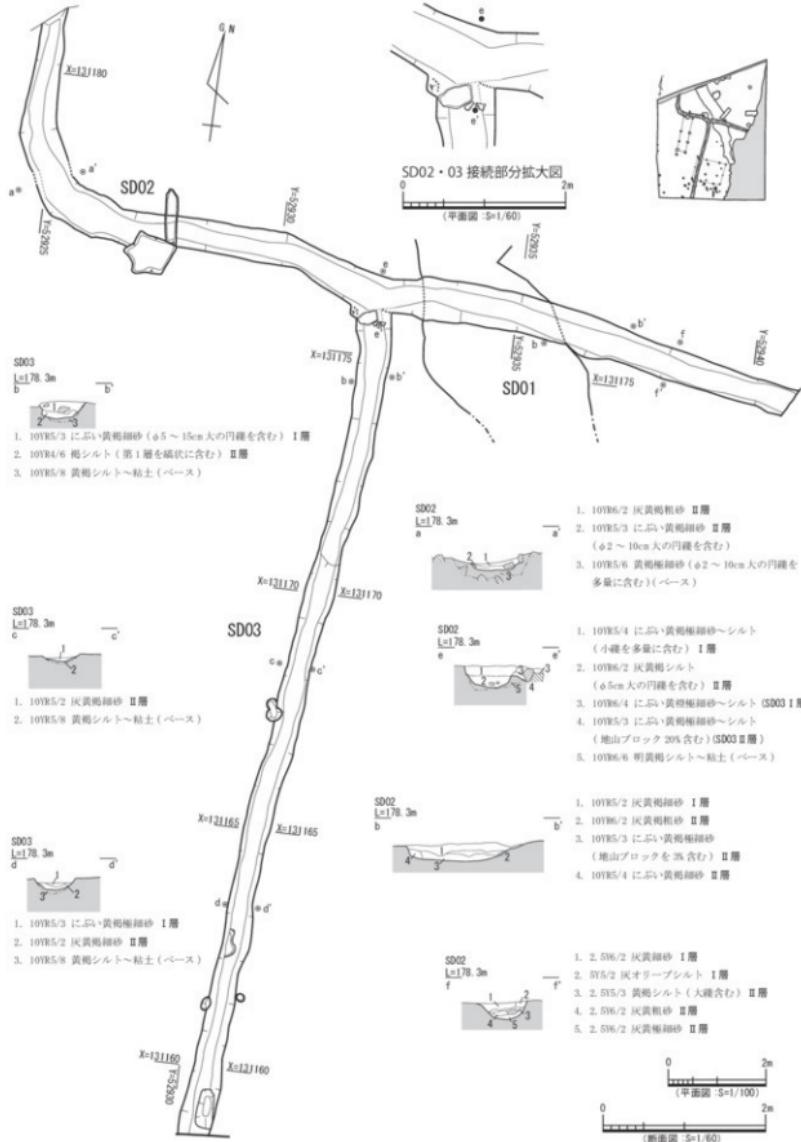
1. 516/3 に富む黄鉱砂 (中種 3%, 小種 5%含む) I層
2. 2. 515/4 黄銅粗砂 II層
3. 101B4/3 に富む黄銅シルト (地山ブロック 2%含む) III層
4. 101B4/3 に富む黄銅シルト (地山ブロック 1%含む) IV層
5. 2. 515/4 黄銅シルト (ベース)



1. 101K1/4 塵砂 I層
2. 101K1/3 に富む黄銅粗砂～シルト (砂礫を含む) II層
3. 101K1/4 塘銅シルト (炭化物を多く含む) III層
4. 101K1/4 塘銅粗砂～シルト (炭化物を少量含む) IV層
5. 101K5/6 黄銅粗砂～シルト (ベース)



第9図 SD01 平面図・断面図



第10図 SD02・SD03 平面図・断面図

< SB02 > (第12図)

調査区南寄りに位置する2間×3間の掘立柱建物である。柱筋は座標北から東に約8度傾いている。

東西方向の柱列の柱間寸法は位置によって不揃いであり、SB02-01・02間とSB02-09・08間は約2.1m, SB02-02・03間とSB02-08・07間は約2.9m, SB02-03・04間とSB02-07・06間は約1.4mである。一方、南北方向の柱列は比較的均等な間隔で並んでおり、柱間寸法は2.1～2.7mである。柱穴の大きさは南側・北側の側柱列では直径20～30cm・深さ20～40cmである。中央の柱は南北の柱に比べると小さく、直径10cm・深さ10cmである。したがって、中央の柱は上屋と壁を補助的に支える役割を果たしていたものと考えられる。

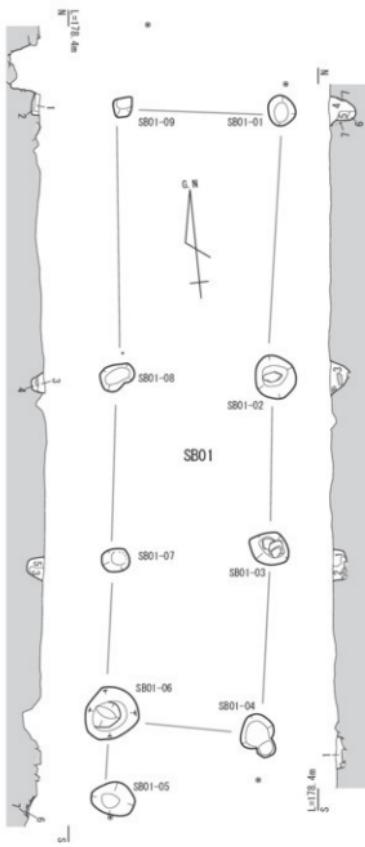
次に埋土を見ると、南側の柱列(SB02-06・07・08・09)では柱痕を確認できた。中央の柱列は単層である。北側の柱列(SB02-01・02・03・04)では柱痕は確認できず上下2層の構造になっている。

SB02-08からは格子状叩き目のある土師質の土器片が出土しており、少なくとも中世以降に属するものであるということは可能である。また、SD03を横切るように建てられていることからSD03が機能していた時期とは異なる時期のものであると言える。

< SK01・SK02 > (第13図)

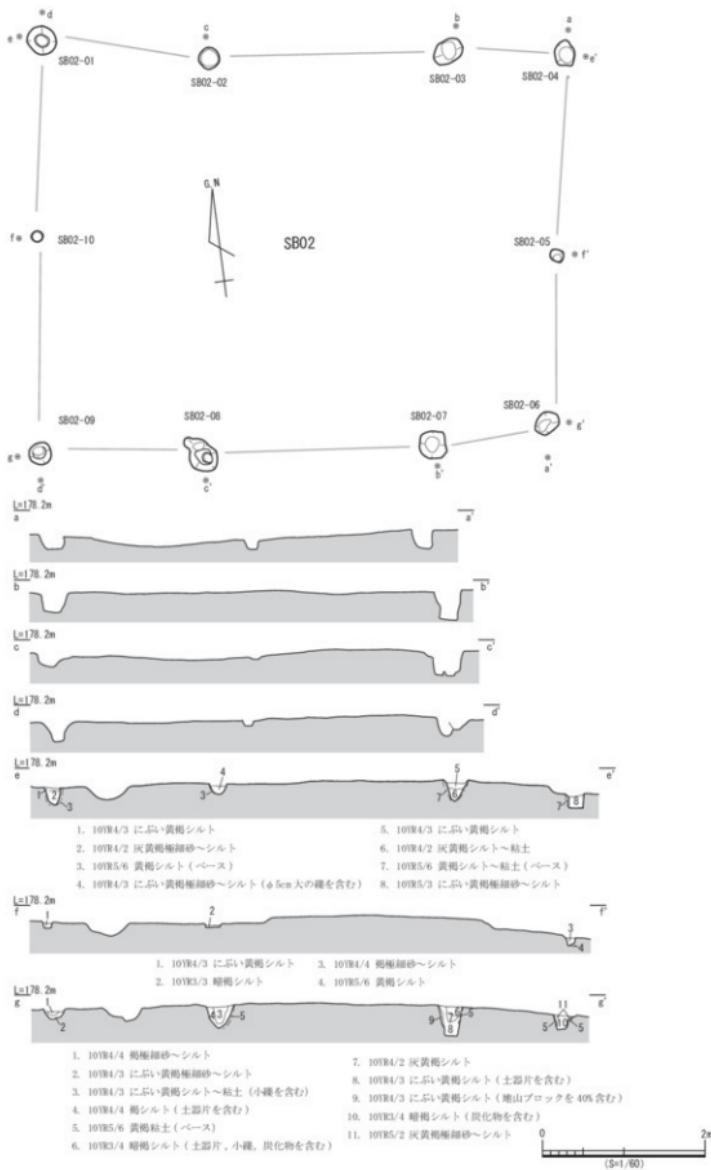
調査区南端に位置する梢円形の土坑である。

SK01は長さ1.06m・幅22cm・深さ10cmであり、底部中央が他



- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1. 2T3/3 暗オリーブ緑シルト (小縫、土器片を含む) | 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト |
| 2. 10YR4/4 黄褐色シルト (小縫を含む) | 2. 2.5Y4/1 黄灰シルト (中縫 2% 含む) |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (中縫 2% 含む) | 3. 2.5Y4/2 増灰黄シルト (小縫 3%、大縫 1% 含む) |
| 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (大縫 1% 含む) | 4. 2.5Y3/3 暗オリーブ緑シルト (小縫 5%、土器含む) |
| 5. 10YR4/2 暗黄褐色シルト (中縫 2% 含む) | 5. 2.5Y3/2 増灰シルト |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト→粘土 | 6. 2.5Y4/2 増灰黄シルト |
| 7. 10YR5/8 黄褐色シルト→粘土 (←) | 7. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (←) |

第11図 SB01 平面図・断面図



第 12 図 SB02 平面図・断面図

の部分より深く直径 28 cm・深さ 12 cm のピット状に掘り窪められている。

SK02 は長さ 1.4 m・幅 22 cm・深さ 34 cm であり、SK01 と類似した形状を呈する。底部中央北寄りには直径 30.2 cm・幅 14 cm の石が据えられている。このような形状は、布掘のピットに類似しており、SK01・02 も布掘ピットである可能性が考えられる。ただし、このような土坑は今回の調査範囲内では上記の 2 基以外検出されておらず、SK01・02 と組み合うようなピットは存在しない。これらが調査区南端に存在することから、本調査範囲の南側に布掘のピットで構成される建物跡が存在する可能性もあるが現段階では判断できていない。^{注 1)}

SK01・02 墓土より土師質の土器小片が少量出土しているが、時期の特定は困難である。

< SK03 > (第 13 図)

直径 70cm・深さ 24cm の円形の土坑である。埋土中には直径 4cm 程度の砂岩円礫を含み、底部付近から 13 世紀前葉～14 世紀前葉に属すると考えられる足金の鏃部・脚部が出土している（第 16 図－26・27）。

< SK04・SK05 > (第 13 図)

SK04 は調査区中央に位置する長径 1.4 m・深さ最大 35 cm の土坑である。遺構底部は起伏に富んでおり、埋土は焼土や炭化物を多く含む。SK05 は調査区北中央、SD01 の東辺に接する長径 1.8 m・深さ最大 18cm の土坑である。SK04 と同様に底部は細かい起伏に富んでおり、埋土の状況も SK04 と類似している。このような共通点から、両者は同じ性格をもつ遺構である可能性が高い。

焼土や炭化物は埋土中に均等に混在しており、焼成土坑にみられるような土坑底部や壁面が焼けるといった特徴は見られないことからその性格は明らかにできていない。SK05 からは 10 世紀前葉～後葉の土師器皿が出土しており、この時期に形成されたものであるといえる（第 16 図－21・22）。

< その他のピット >

建物は復元できなかったが、上記の遺構以外に 33 基のピットを検出している。特に、SD02 以南に集中する傾向を指摘できる。なお、SB02 南側では 2.3～2.4 m 間隔で東西に並ぶ柵列の可能性があるピット列（SP10・12・14・15・17）を検出している。

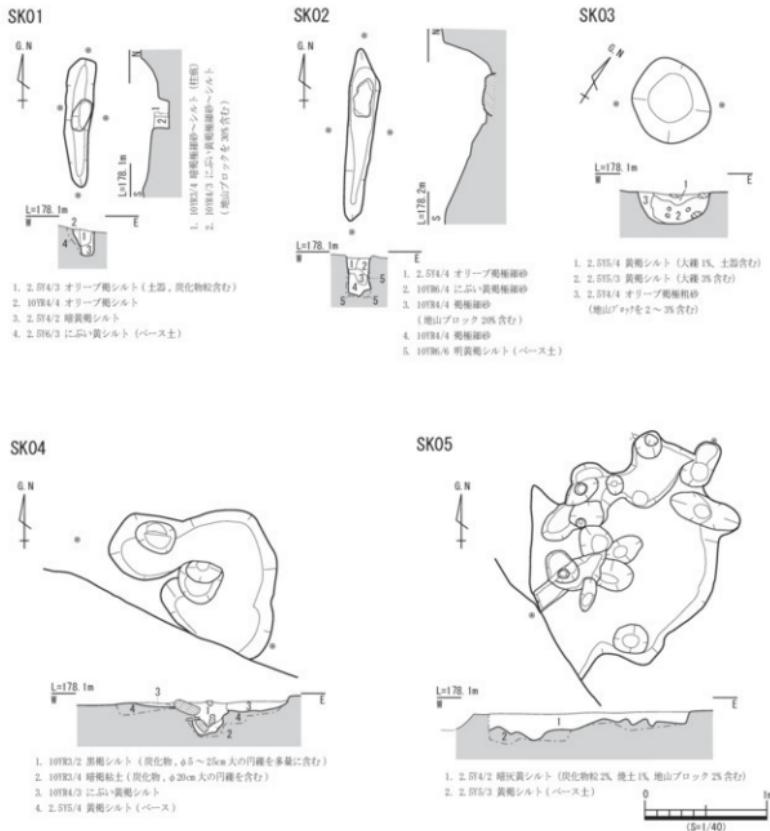
これらのピットの規模は直径（長径）20～40cm、深さ 10～36cm である。埋土はいずれも類似しており、黄褐色～暗褐色系のシルト等で埋没する。このうち、SP21 は SK01・02 と類似した平面形を呈しており、同様の遺構である可能性も考えられる。また、唯一 SP13 のみ SD03 に切られる。

これらのピットの中で、遺構の時期を考える手がかりになる遺物が出土しているのは SP04 である。SP04 は SD03 を切るピットであり、足金の鏃部が複数出土している（第 16 図－23・24）。遺物の所属時期は 14 世紀前葉～16 世紀前葉である。埋土が類似する他の柱穴に關しても時期比定困難な土師質の土器小片や陶器片が出土しており中世以降に形成されたものであると考えられる。

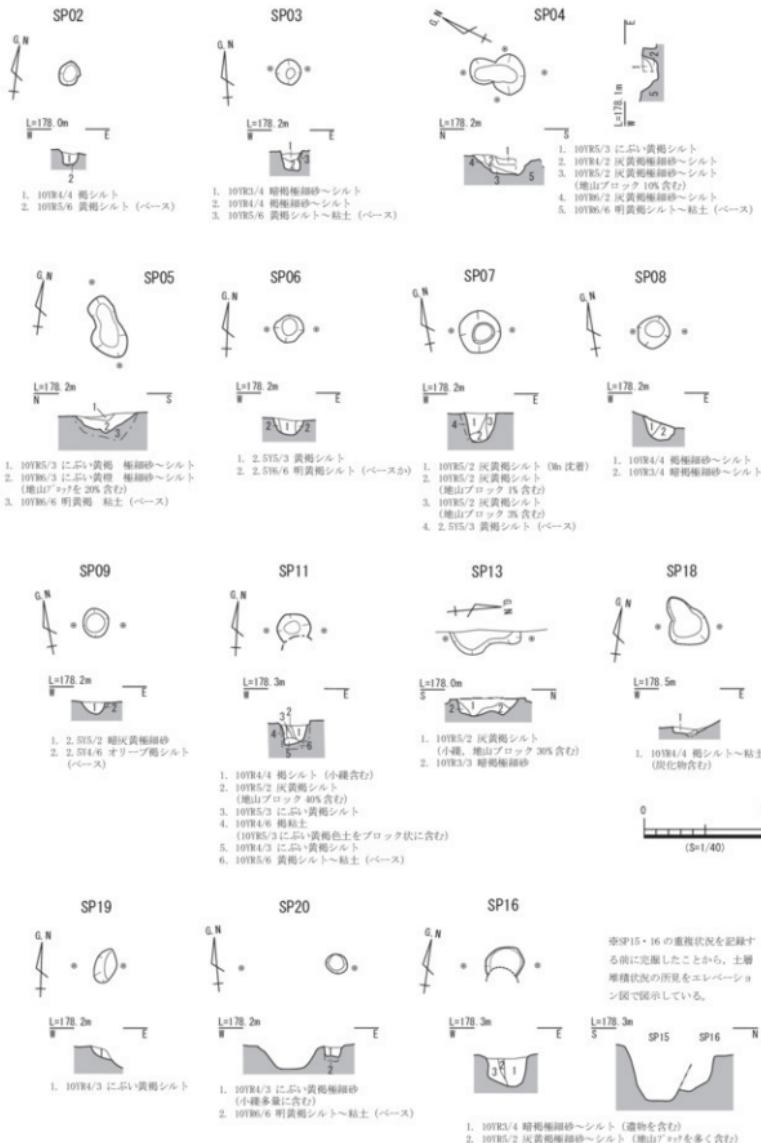
< まとめ >

以上のように、西地遺跡で確認した遺構には① SD01 が機能していた段階（10 世紀前半以前～12 世紀第 3 四半期もしくは第 4 四半期）、② SD02・03 が機能していた段階（12 世紀第 3 四半期もしくは第 4 四半期以降～14 世紀前葉（16 世紀前葉まで下るか））、③ SD03 が埋没し SD02 のみが機能していた段階（16 世紀前葉（14 世紀前葉までさかのぼるか）～近世）、④ SB01・02 が建てられた段階（②・③との先後關係や SB01・02 の先後關係は不明）という段階があることがわかつた。（岡本）

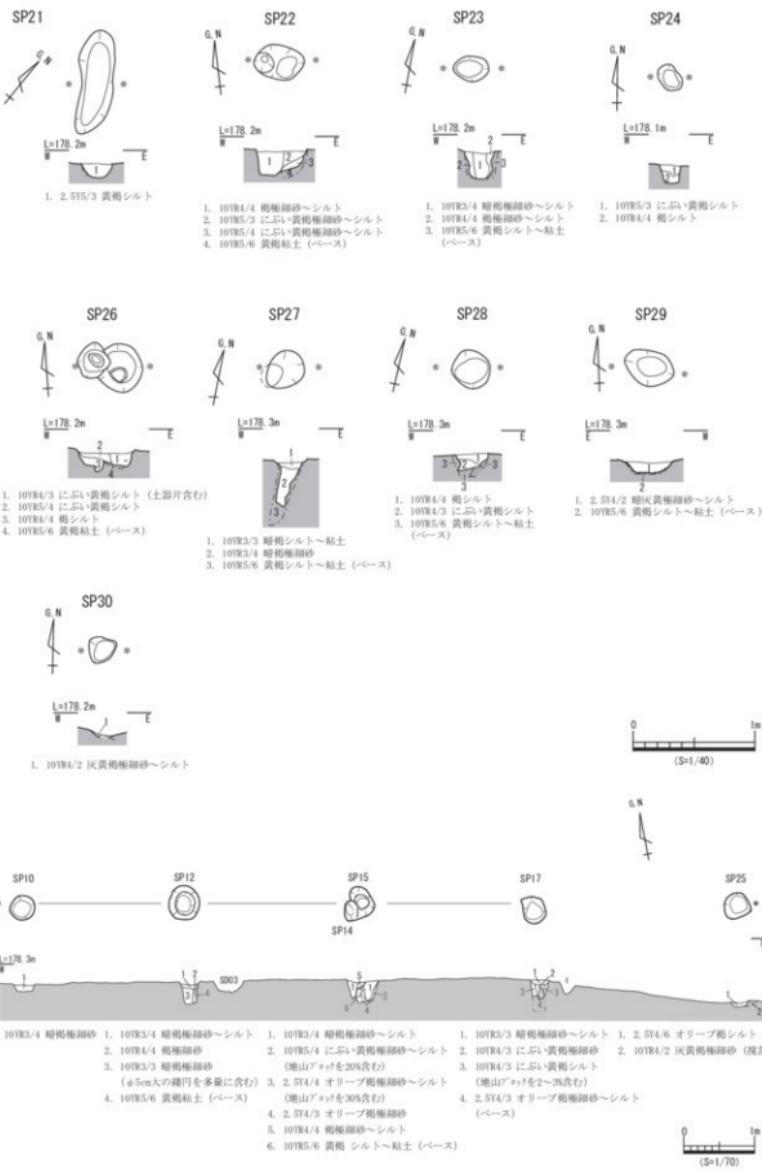
注 1) 当初、勘溝であると考え長軸に対して直行する方向に壁を設定して掘削を行った。しかし、掘削を進めううちに上記のような布掘のピットを想定させる形状が明らかになったため、長軸と直行方向の断面の記録を取った後に、長軸と平行する方向のエレベーション図も作成した。



第 13 図 SK01・SK02・SK03・SK04・SK05 平面図・断面図



第14図 SP平面図・断面図①



第15図 SP 平面図・断面図②

第2節 遺物

本遺跡における遺物の出土量は比較的少量であるとともに、残存状況の良好な資料も少量である。そのような中でも、比較的時期的特徴をとどめる遺物が複数出土しており、本遺跡で確認された遺構の所属時期を推測することが可能である。以下では、出土遺物の概略を構造別に記述する。

なお、出土遺物の相対年代の表記は佐藤竜馬氏による高松平野における編年案（佐藤 2000）を引用するが、佐藤氏の編年では扱われていない11世紀前葉以前および14世紀中葉以降における相対年代の表記は片桐孝浩氏による丸亀平野における編年案（片桐 1992）を引用する。

< SD01 >

本遺構では、前述のとおり土壌埋没の単位に基づき埋土を3層（I～III層）に分類して遺物を回収した。I層からは17が出土した。17は土師質甕の口縁部であり、佐藤氏の分類による土師質甕Eにあたる。13世紀以降に使用され始める土師質鍋の口縁部である可能性も考慮したが、推定される口径が小さいことから土師質甕であると判断した。口縁部の器壁厚が比較的厚い点、端部に面が形成されているものの、上方へのつまみ上げが弱い点から佐藤編年II-1期前後に属するものであると考える。

II層からは最も多くの遺物が出土した。1・2・5～9・11・12は土師質坏である。なお、2・7・8では底部にヘラ切り痕がみられることから、底部分離手法はヘラ切りであったと言える。このうち1・2・5・7～9は佐藤氏の分類による坏Aにあたる。坏Aは須恵器坏を模して生産されたいわゆる「回転台土師器」の一種であり、11世紀前葉以降生産が停止する。最も残存状況のよい1は底部突出の状況が比較的明瞭であるとともに立ち上り部の器壁厚が薄い点、立ち上がり部の外傾度が比較的強く口径と底径の差が大きい点から片桐編年I-②期前後に属するものであると考える。7～9については底部の一部のみ残存している状況であるが、底部突出の状況が比較的明瞭である点から1と同様に片桐編年I-②期前後に属するものであると考える。

2・5は底部突出の状況が不明瞭である。加えて、立ち上り部の外傾度が比較的弱く、推定される口径と底径の差が比較的小さい点から、片桐編年I-④期前後に属するものであると考える。

6・11・12は口縁部付近のみの出土であり具体的な器種比定は困難であるが、器壁厚の薄さおよび外傾度から土師質坏であると考えられ、少なくとも片桐編年I-②～I-④期以降に属するものであると考える。

第4表 相対年代一絶対年代対照表

片桐編年	I-①期	9世紀後半
	I-②期	10世紀前葉
	I-③期	10世紀中葉
	I-④期	10世紀末葉
	II-①期	11世紀前葉
佐藤編年	I-1期	11世紀中葉～11世紀第3四半期
	I-2期	11世紀第4四半期
	I-3期	12世紀第1四半期～12世紀第2四半期
	II-1期	12世紀第3四半期～12世紀第4四半期
	II-2期	13世紀第1四半期
	II-3期	13世紀第2四半期～13世紀第3四半期
	II-4期	13世紀第3四半期～13世紀第4四半期
	II-5期	13世紀末葉～14世紀前葉
	III-②期	14世紀中葉
片桐編年	III-③期	14世紀後葉
	III-④期	15世紀前葉
	III-⑤期	15世紀中葉
	III-⑥期	15世紀後葉
	III-⑦期	16世紀前葉
	III-⑧期	16世紀中葉
	III-⑨期	16世紀後葉

13は土師質甕または土師質羽釜の口縁端部である。器壁が薄く、端部が上方へ強くつまみ上げられており明瞭な面が形成されている。よって、片桐編年I-②～I-③期に属するものであると考える。

15は土師質甕の焚き口付近の一部である。外面はナデ調整後ハケ調整を行う。一方、内面はナデ調整で仕上げられている。焚き口周縁部の斐状の突出部は、断面観察の所見から甕本体の焚き口部に粘土帯を貼り付けて形成されていると考えられ、貼り付け部には指頭圧痕が明瞭に残存している。土師質甕は遅くとも片桐編年I-①期にはみられ、佐藤編年II-4～II-5期前後までみられることが指摘されている（片桐1992）。詳細な時期比定は困難であるが、SD01出土遺物の所属時期の上限は片桐編年I-②期、下限は佐藤編年II-1期であることから、17も当該期間に属するものである可能性が高い。

3は須恵器壺の口縁部付近である。須恵器壺は片桐編年II-①期以降生産が停止することが指摘されている（片桐1992）。よって、3は片桐編年I-④期以前に属するものであると考える。

4は須恵器壺の底部である。底部にはヘラ切り痕がみられることから、底部分離手法はヘラ切りであったと言える。口縁部等が残存しないことから詳細な時期比定は困難である。

16は須恵器甕の体部である。外面には格子状の叩き目が明瞭に残存しているが、内部には当て具痕が残されておらず、ナデ調整により消失したと考えられる。口縁部等が残存しないことから詳細な時期比定は困難である。

14は用途不明の鉄製品である。全体が鋒に覆われており細かな形状は不明であるが、方形に成形された可能性のある部分が認められる。鉄滓である可能性もある。

III層からは10が出土した。10は土師質壺であり、佐藤氏の分類による壺Aにあたる。底部にはヘラ切り痕がみられることから、底部分離手法はヘラ切りであったと言える。底部突出の状況が比較的明瞭であるとともに、立ち上り部の外傾度が比較的強く推定される口径と底径の差が比較的大きい点から片桐編年I-②期前に属するものであると考える。

以上、SD01出土遺物の概要を示した。II・III層からは片桐編年I-②～I-④期の遺物が出土している。また、最終埋没層であり短期的に堆積したことを示す均質な砂層であるI層からは佐藤編年II-1期の遺物が出土している。このことは、SD01が少なくとも10世紀前葉段階には開削され、12世紀中葉～後葉段階以降に完全埋没したことを示唆する。

その他、小片であり図示しえなかつたが、主にII層から上記土師質壺Aと同様の胎土の特徴を有する土器片が多量に出土している。また、外面にハケ調整が施された器壁が厚く、胎土の粗い土器器片も多く出土しており、土師質甕の体部である可能性が高い。

< SD02 >

SD02出土遺物は18・19である。18は足釜脚部であり、表面には僅かながら板ナデの痕跡が残る。足釜の生産開始は佐藤編年II-2期以降であることから、当該期以降に属するものであると考える。19は足釜口縁部および鰐部である。口縁端部は丸みをもたせて分厚く仕上げられ、鰐部は下部に接合痕を残すものの極めて痕跡器官化した瘤状の形態を呈する。佐藤氏の分類による足釜C類にあたり、片桐編年III-⑤～III-⑦期に属するものであると考える。

その他、図示しえなかつたが下層から近世の磁器片も出土している。よって、本遺構は少なく

とも近世以降に埋没したと考えられる。

その他、土師器・須恵器・陶器片が多量に出土している。

< SD03 >

SD03 出土遺物は 20 である。20 は口縁部付近のみの出土であり、具体的な器種比定は困難であるが、器壁厚の薄さおよび外傾度から土師質坏であると考えられ、少なくとも片桐編年 I - ②～I - ④期に属するものであると考える。本遺構は SD02 と少なくとも一定期間は同時並存したと推測されることから、20 は二次的混入である可能性が高い。

その他、土師器および陶器片が出土している。

< SK03 >

SK03 出土遺物は 26・27 である。26 は足釜鈸部である。水平に比較的長く延びる鈸部であり、端部の調整痕は摩滅により読み取れないが明瞭な平坦面が形成されている。また、鈸部上面および下面には綫および横方向のハケ調整が施されている。よって佐藤氏の分類による足釜 A I 類または A II 類にあたると考えられ、佐藤編年 II -2 期～II -5 期に属するものであると考える。27 は足釜脚部である。表面には板ナデの痕跡が明瞭に残されている。詳細な時期比定は困難であるが、佐藤編年 II -2 期以降に属するものであると考える。

その他、土師器片が少量出土している。

< SK05 >

SK05 出土遺物は 21・22 である。両者ともに底部のみの出土であり、具体的な器種比定は困難であるが、底部突出の状況が比較的明瞭であることから土師質坏 A であると考えられ、少なくとも片桐編年 I - ②～I - ④期に属するものであると考える。

その他、土師器小片が少量出土している。

< SP04 >

SP04 出土遺物は 23・24 である。23 は足釜口縁部および鈸部である。口縁部の長さが鈸部よりも長い点、口縁部および鈸部端部に面が形成されず丸くおさめられている点から佐藤氏の分類による B II 類にあたると考えられる。鈸部上面基部にはナデ調整、下面基部には綫方向のハケ調整が施されており、内面には一部で横方向のハケ調整が残されている。以上のような特徴から佐藤編年 II -5 期に属するものであると考える。

24 は足釜鈸部である。残存状況が悪く詳細な時期比定は困難であるが、鈸部は極めて痕跡器官化した瘤状の形態を呈すると考えられるとともに、鈸部から口縁部にかけての内傾度合いが比較的強い。以上の点から、佐藤氏の分類による C 類にあたり、片桐編年 III - ⑤～III - ⑦期に属するものであると考える。

その他、土師器小片が少量出土している。

< SP16 >

SP16 出土遺物は 25 である。25 は口径が矮小化し、外傾する短い口縁部を有することから佐藤氏の分類による皿 B III -3 または皿 B III -4 にあたると考えられる。よって、佐藤編年 II -3 ～4 期に属するものであると考える。

<その他の遺構>

ここでは、遺構に伴い出土したものの、残存状況が悪く図示し得なかった遺物の概要について記載する。

SB01を構成する柱穴から土師器小片少量および用途不明鉄製品1点が出土している。

SB02を構成する柱穴(SB02-07・08)から土師器片が出土している。このうち、SB02-08からは格子状叩き目の残存する土器片が出土している。13世紀前後以降の土師質足釜や土鍋、甕においてしばしば格子状叩き目が残存する。器種を特定することは困難であるが、少なくとも中世に属するものであると言える。

SK01・02からは土師器小片が少量出土している。

その他、複数の柱穴から土師器・陶器小片が出土している。

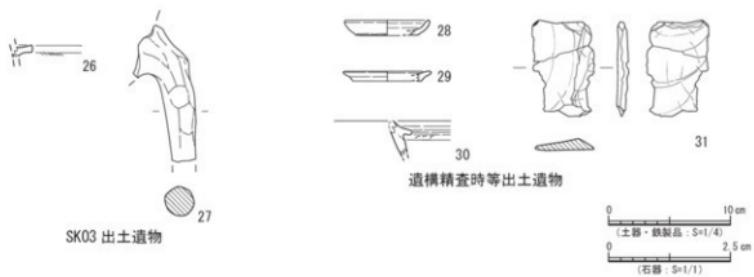
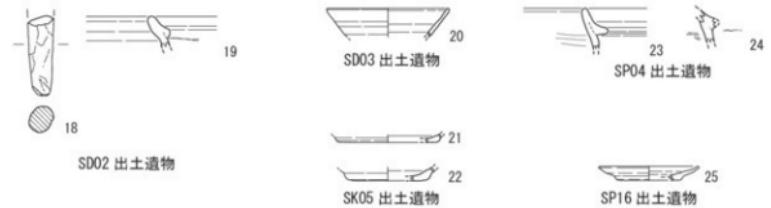
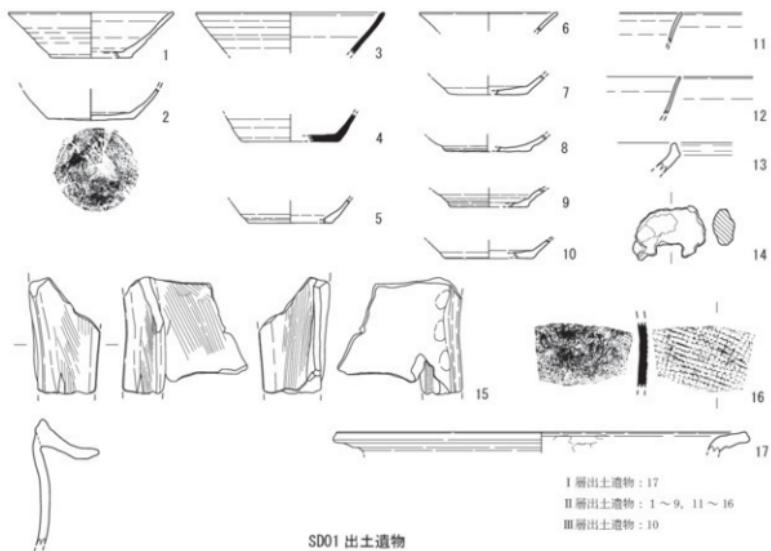
<遺構精査等>

遺構精査時等出土遺物は28～31である。28・29は皿である。口径が極めて矮小化し、外傾する短い口縁部を有することから佐藤氏の分類による皿B III-4にあたると考えられ、佐藤編年II-4～II-5期に属するものであると考えられる。30は足釜口縁部および鍔部である。口縁部と鍔部の長さはほぼ同じであり、口縁部と鍔部の境目は極めて不明瞭である。また、口縁部および鍔部の端部に面は形成されず丸くおさめられ、分厚く仕上げられている。なお、鍔部下端には爪痕が僅かながらにみとめられる。以上のような特徴から、30は佐藤氏の分類によるB IV類にあたると考えられ、片桐編年III-④期に属するものであると考えられる。31はサヌカイト片である。小片であり器種は不明である。

一方、調査区南壁部断ち割り調査の際、ベース土である黄褐色シルト層から土師質の土器片が少量出土している。いずれも胎土に粒径の比較的大きい砂粒を多量に含んでおり、古代以降の土器片とは一見して区別可能であることから、弥生時代以前の土器である可能性がある。同様の特徴を有する土器片はSD01埋土等からも少量出土している。(池見)

参考文献

- 佐藤竜馬編 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会
佐藤竜馬 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
片桐孝浩 1992『中小河川大東川改修工事(津ノ郷橋・弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会
中世土器研究会編 2004『概説 中世の土器・陶磁器』真福社



第 16 図 出土遺物

第4章 総括

第1節 検出遺構について

今回の調査対象地は、香東川上流域西岸に形成された新古2段の河岸段丘のうち、下段の段丘面上に位置する。当該地における土地利用形態の変遷について遺構の検出状況および出土遺物に基づいて時期別に記載する。

古代以前 当該期に属する遺構は確認していない。しかしながら、古代以降の遺構面である黄褐色シルト層および遺構埋土より弥生時代以前に属する可能性のある土器細片やサヌカイト片が少量出土している。前述のように、高松平野では弥生時代中期後葉～後期前葉および後期後葉段階における丘陵部での土地利用事例が多くみられることから、調査地西側の上段段丘面上等が弥生時代中期中葉～後期前葉または後期後葉に居住域等の用途で利用されていた可能性が想定される。

古代（10世紀前葉～12世紀後葉） 当該期には溝1条（SD01）、性格不明な土坑2基（SK04・05）が形成される。明確な建物跡等は確認していない。SD01は南東から北西方向へ延伸する大形の溝であり香東川から下段の段丘面上へ導水するための水路であったと考えられる。土層の堆積状況から複数回にわたり浚渫が繰り返され、当該期を通して利用され続けたと考えられる。また、SD01両岸に隣接するSK04・05からは多量の炭化物および焼土が出土しており、同様にSD01 III層でも分布に若干の粗密を見せながらもほぼ全域で多量の炭化物および焼土が出土している。これらの炭化物・焼土の性格は明確にしえないが、SD01 II層からは用途不明の鉄製品が出土しており、その形状から鉄滓である可能性も考えられる。よって、炭化物・焼土は鍛冶遺構との関連を想定することも可能であり、SK04・05が鍛冶遺構に対応するものである可能性も考えられる。しかしながら、前述の鉄製品以外鍛冶遺構を示す鉄滓等は皆無であることから、現段階では判断を保留せざるを得ない。

中世以降（13世紀前葉～） 当該期には、東西または南北の正方位から6～8度程度東に傾いた方向に主軸をもつ溝状遺構2条（SD02・03）および同様の主軸方向を呈する掘立柱建物跡を少なくとも2棟（SB01・02）確認している。SD02・03は検出状況から少なくとも一定期間は同時並存したと考えられるものの、合流地点における土層の切合い関係からSD03が先行して廃絶したと言える。また、合流地点には長径45cm程度の砂岩および拳大の円礫が据えられ堰止められたような状況を呈することから、SD03廃絶の契機は人為的・意図的なものであったと考えられる。SD03の廃絶時期はSD03を切るSP04出土遺物の年代から15世紀中葉～16世紀前葉以前であったと考えられる。一方、SD02は下層から近世段階の磁器等が出土していることから、当該期まで機能し続けたと考えられる。

次節で詳説するが、2条の溝はその形状から土地区画と導・排水機能を兼ね備えたものであると考える。後述する建物跡等の大部分はSD02以南で確認されている一方、SD02以北では対称的に遺構密度が極めて希薄である。SD02以北は耕作地であった可能性も考えられ、SD02が建物群

と耕作地の区画機能を有していたと考えることも可能である。しかしながら、明確な旧耕作土、畦畔等、耕作地を示す証拠は確認していないことから一つの可能性としてとどめておく。

掘立柱建物については、柱穴からの出土遺物が少量であり明確な時期比定は困難であるが、前述の溝と主軸方向を合致させており少なくとも一定期間の同時並存が想定される点、およびSB02を構成する柱穴から確実に中世を示す遺物が出土している点から、当該期に属するものであるとした。ただし、SB02はSD03と重複する位置関係にあることから時期差を想定可能であるものの前後関係は不明である。

その他、主としてSB02南方、特にSB02周辺部において多量の柱穴を確認している。布掘ピットである可能性のあるSK01・02を含め、出土遺物から時期比定することは困難であるが、当該地における土地利用形態の歴史的経緯および埋土の特徴、SD03との重複関係等を総合的に評価して、ほぼすべて当該期に属するものであると考える。ただし、SD03に切られる柱穴に関しては、古代までさかのぼる可能性も考慮すべきである。（池見）

第5表 主要遺構形成時期模式図

	10世紀 前葉	11世紀 中葉	11世紀 後葉	12世紀 前葉	12世紀 中葉	13世紀 前葉	13世紀 中葉	13世紀 後葉	14世紀 前葉	14世紀 中葉	14世紀 後葉	15世紀 前葉	15世紀 中葉	15世紀 後葉	16世紀 前葉	16世紀 中葉	16世紀 後葉	17世紀以降
SD01																		
SK04/05																		
SD02																		
SD03																		
SB01																		
SB02																		
その他の柱穴																		

■ 当該遺構の所属時期を示す遺物が出土していることを示す。
■ 出土遺物や他の遺構との位置関係から当該期に機能した可能性が極めて高いことを示す。

第2節 考察

1 番東川西岸河岸段丘上における土地利用形態の画期

今回の調査対象地では10世紀以降における土地利用の履歴を確認した。具体的な遺構の変遷状況は前節で詳説したが、13世紀前葉を境に土地利用の在り方に明確な変化がみられる。本項では、各期における土地利用形態の差異を明確化した上で、土地利用形態変化の背景および当該事象がもたらした影響について考察する。

10世紀前葉～12世紀後葉 前述のように番東川本流から下段の段丘上へ導水するための水路等が開削されるのみであり、居住域としての土地利用状況は見られない。13世紀前葉以降に比して、居住および耕作に適さない土地条件にあった可能性が想定できる。このことは、当該地南方から河川本流の流水を直接取水しうる程度に河床が高かったと想定できる点、SD01が洪水砂により最終埋没を遂げている点、現状で認められる氾濫原崖が調査区東端部を通過している点から推測可能である。

現地表面の標高やSD01の延伸方向を勘案すると、SD01は北西方へ進んだ後、上段の段丘崖裾部に沿って北流し、河川本流へと排水するルートをたどったと考えられる。このような前提に立った時、塩江中学校北側に広がる上段段丘崖裾部（SD01以東）と氾濫原崖間の平坦地が当該期の耕作地の候補として挙げられ、居住域は上段段丘面上に形成された可能性が考えられる（第18図）。

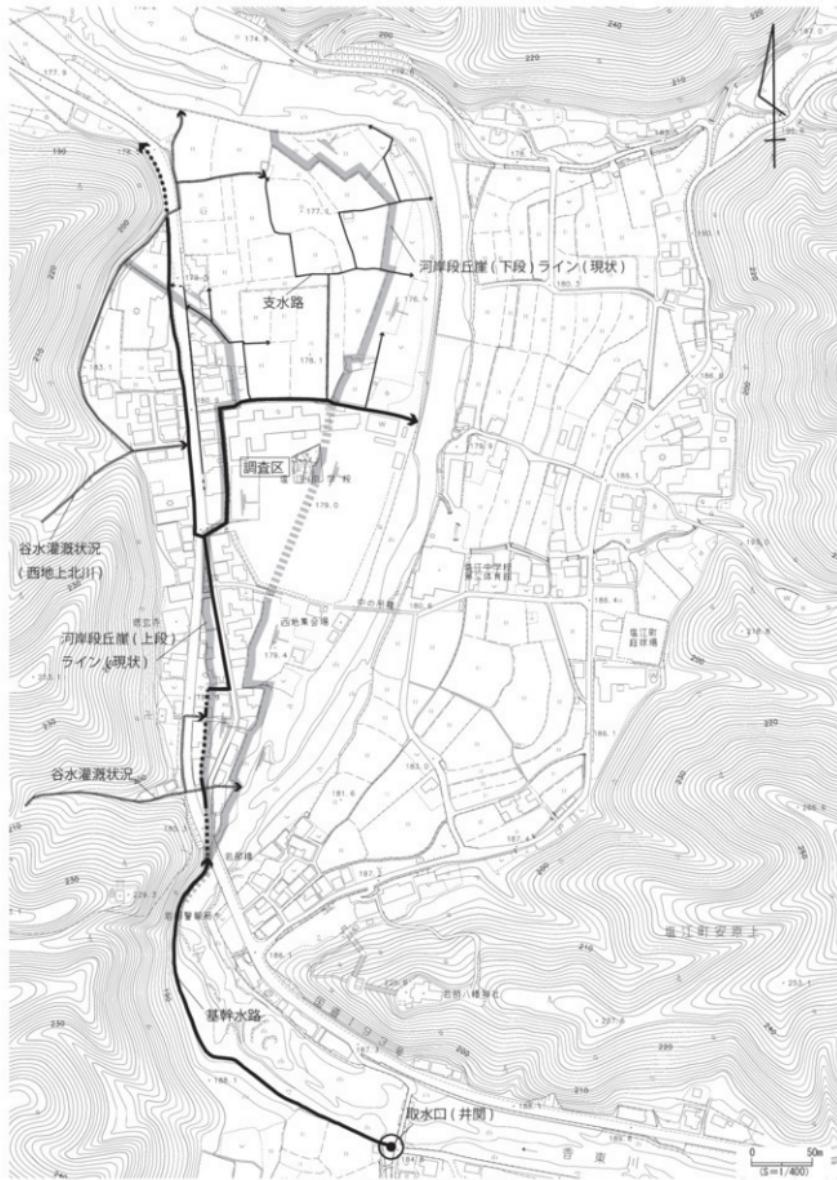
13世紀前葉以降 当該期には調査対象地内にも建物跡が形成され、積極的な土地利用を示す区画溝が開削される等、前段階との明確な差異が認められる。この背景として地形面の安定化、すなわち香東川河床の低下が生じたと考えられる。

一方、河床の低下により前段階のように香東川本流からの流水を段丘面上へ直接取水することは困難となる。現在、調査地の位置する河岸段丘上面での主要な灌漑用水は香東川本流から取水している。隣接地からの取水が困難なため当該地から300m程度上流に位置する後川との合流点付近に井戸を設け、そこから取水した用水を香東川西岸の崖面に沿うように設置された水路を通して上段段丘面上へ導水し、上段段丘面縁辺部および上段段丘崖裾部に沿って開削された基幹水路を通して各支水路へ配水している（第17図）。中世も水利用上、現在と同様な条件下にあつたと考えられるが、前述のような導・配水システムの成立は、県内の他の事例から少なくとも近世まで待たなければならない。よって、他の水源を確保する必要がある。

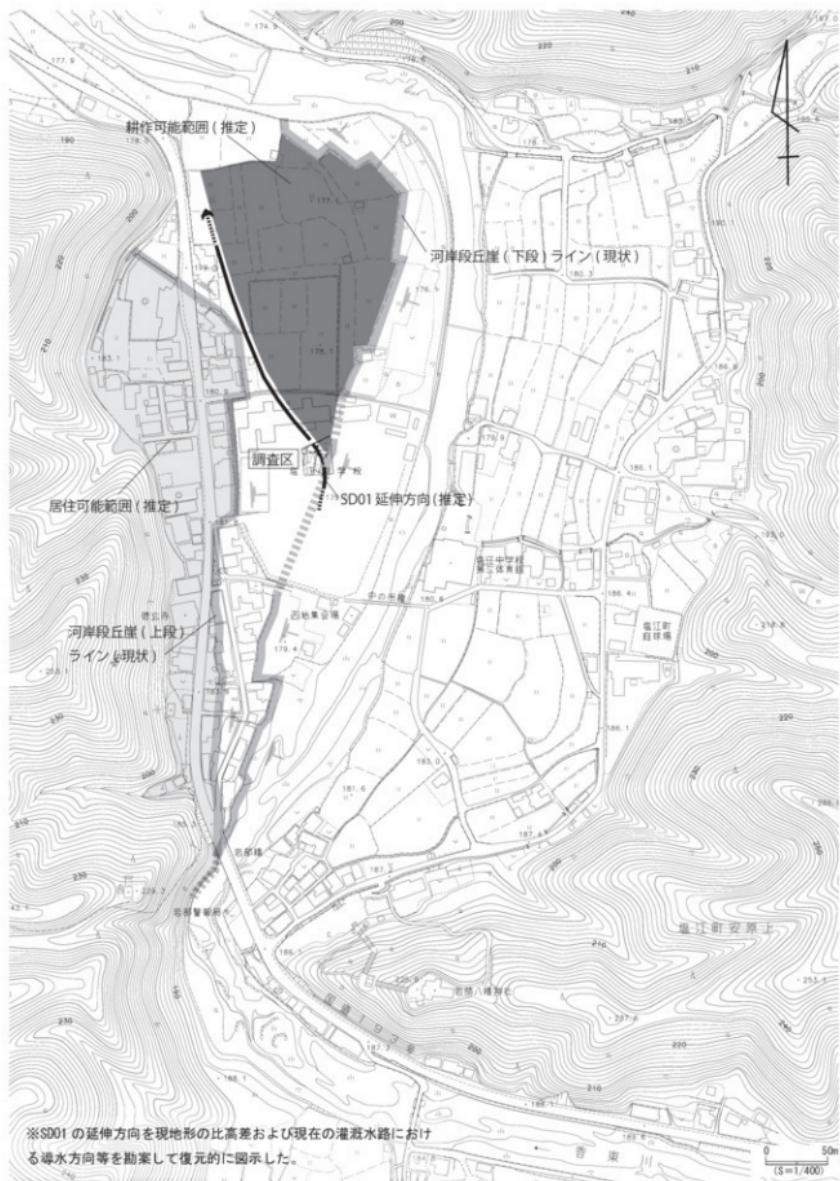
調査地が位置する河岸段丘の西縁を画する丘陵部には恒常に一定量の流水を有する谷筋が少なくとも2本確認できるが、中世にはこれらの谷筋からの流水を灌漑用として利用した可能性がある。このうち、特に西地上北川からの流水は比較的豊富であり、現在でも一部の農地の主要な灌漑用水源となっている。また、下段段丘面上において複数の井戸が現存し、水位が比較的高い状況を見てとれるが、これは湧水点が高いことを示唆し、下段段丘面における湧水を灌漑用水源として利用することも可能であると考える。このように、谷筋からの流水や下段段丘面における湧水を利用することで、上段および下段段丘面のより広い範囲に灌漑可能範囲が拡大し、併せて居住域も拡大されたと考えられる（第19図）。

以上、当該地における10世紀前葉～12世紀後葉と13世紀以降の土地利用形態を比較した。少なくとも調査対象地部分を含む現状で認められる氾濫原崖に近接した部分は、12世紀後葉まで不安定な土地条件にあり、積極的に居住および耕作地として利用されなかった。居住および耕作等を目的とした積極的土地利用に堪えうる程度の地形の安定化は13世紀以降の香東川河床の低下により実現する。また、それに伴う取水源の変更により灌漑可能範囲が拡大し、居住・耕作対象地も上・下段段丘上面の広い範囲に拡大されたと考えられる。

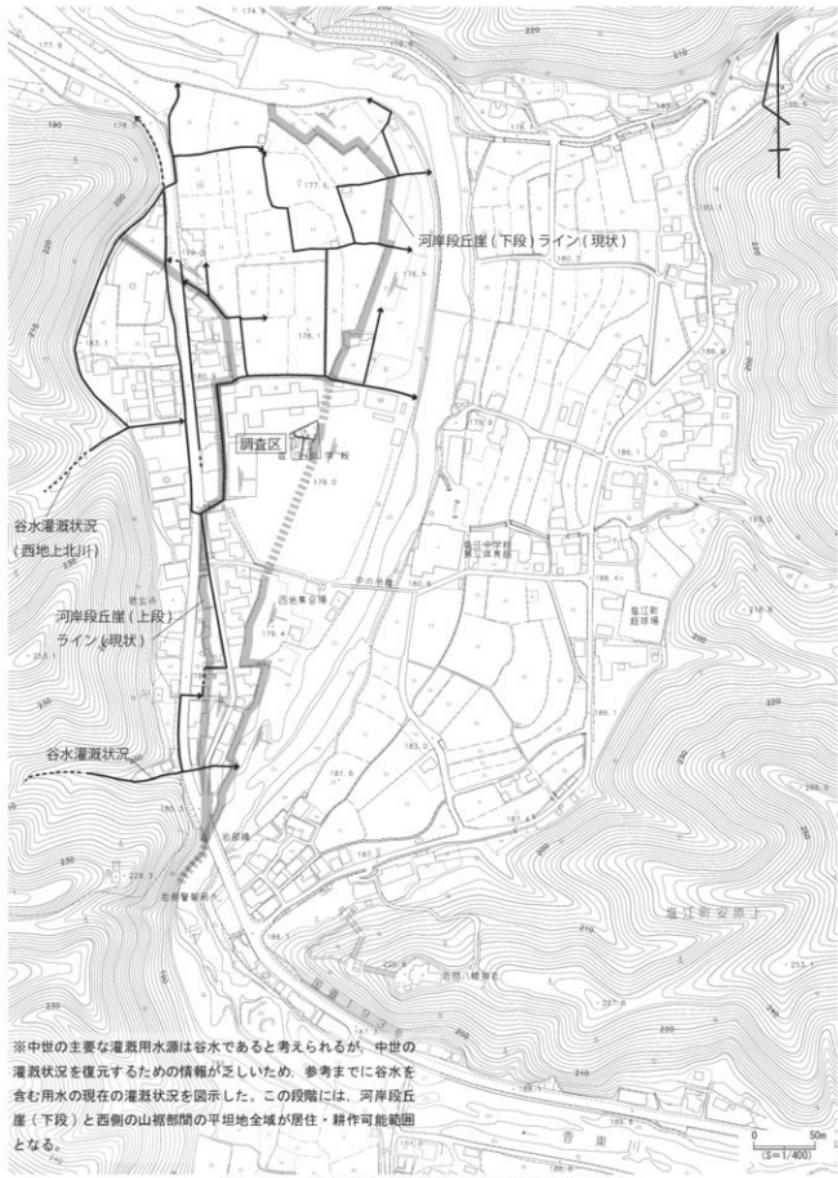
なお、本遺跡で確認された遺構・遺物は、いずれも阿波との主要な交通路であった「大滝寺越」および「相栗越」と同時期に属するものである。特に「相栗越」は本遺跡西側を通過し、本遺跡の所在する「岩部」地域に「借耕牛」の仲介業者「中追い」がいたとされる。しかしながら、それらと本遺跡で確認された遺構との関連は不明であり、阿波との交流のあり方を積極的に示唆する遺物も見出せていない。



第17図 灌漑水路網整備状況（現在）



第18図 灌漑水路網整備状況(10世紀前葉～12世紀後葉)



第19図 灌漑水路網整備状況(13世紀前葉以降)

2 中世区画溝の位置付け

平野部における中世の土地割りは、一般的に一定の方位性と規格性をもつ条里地割として認められる。「条里制」が施行された7～8世紀は、天皇により制定された諸法令や制度、行政区画の設定等を基軸として政権運営および地方支配が実施された段階に対応し、「条里制」も施行当初は上記のような統治体系の在り方の中から制度化された国家的事業であったと考えられている。高松平野においても平野部の旧河道、後背湿地等を避けるように、遅くとも7世紀後葉には条里地割（磁北から概ね9～11度前後東に傾く）が施工されたことが、松縄下所遺跡（松縄町）や香西南西打遺跡（香西南町）で確認された坪界溝の事例等から推測可能である。

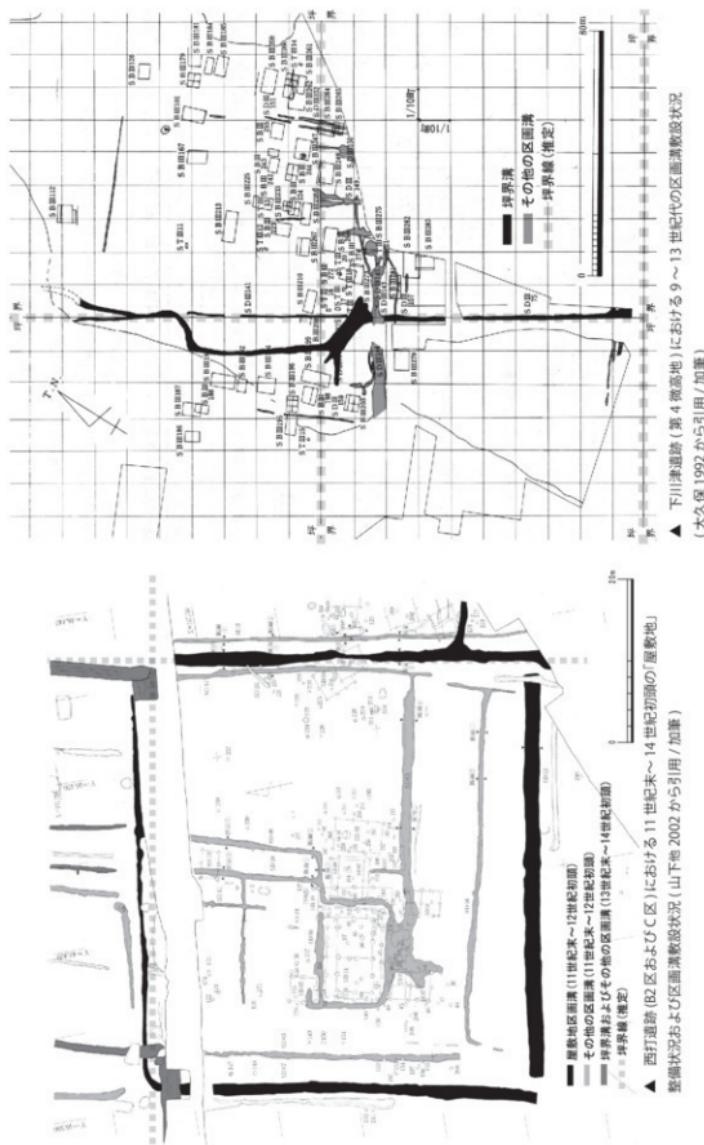
中世には、古代に施工された条里地割がほぼ踏襲されるとともに、地形の平準化や土地利用範囲の拡大に伴い平野の広い範囲に拡充され、建物配置や土地面積は少なからず条里地割の規制を受けることとなる。実際、丸亀平野に位置する下川津遺跡（坂出市）や中村遺跡（普通寺市）、上一坊遺跡（普通寺市）では1/10町（約11m）を基礎的な単位として整備された計画的な土地割りの存在が指摘されている（大久保1990）（第20図）。

中世の土地区画は溝や柵、道路により明確化されることが多い、考古学的にはそれらの痕跡を頼りに居住の単位等を抽出することとなる。このうち、溝については坪界に開削されるものは幅1.5m以上を有するものを含み、また複数回にわたる同一地点での再掘削あるいは付替えが実施され、比較的長期にわたり維持管理され続ける傾向がある。一方、坪内あるいは集落内の小区画として設けられる溝はほぼすべて幅1m未溝である。ただし、例外的に端的な土地区画の明示を図る「屋敷地」については、周囲に幅1.5m以上の溝を巡らせることが多い。西打遺跡で確認された「屋敷地」が好例である（第20図）。西打遺跡では11世紀後半～12世紀前半に「屋敷地」が形成される。当該「屋敷地」は概ね1/4坪、すなわち一辺約50～60mの平面方形を呈し、北・東辺は坪界線に合致させている。周囲は幅2～3mの溝に囲まれ、当該溝の内側には幅1m前後の溝が一定の空白地帯を保ちながら平行して掘削されている。二重の溝間には塀等の構造物の存在が想定可能であるが、塀をはじめとする立体的な区画施設の存在を示す遺構・遺物は検出されていない。建物群は基本的に二重の溝内側の空間に形成される。当該空間地には「屋敷地」の主軸方向に合致する溝が東西および南北方向に開削され、敷地内の区画機能と集・排水機能を有していたと考えられる。なお、「屋敷地」東辺および北辺に合致する坪界溝はその検出状況および出土遺物から当該「屋敷地」が廃絶される13世紀以降も若干の場所移動および同一地点での再掘削を行いつつ維持され続けたと考えられる。

一方、山間部の地形的独立性を有する河岸段丘上に位置する西地遺跡で確認されたSD02・03については、直線的に延伸し、双方が直行するとともに、SD02は直角に折れる形状をとることから、方形または長方形を指向する土地区画の意図も兼ね備えた溝であると言える。これは、少なくとも一定期間同時並存したと考えられる建物跡の配置が当該溝による区画の方位性に規定されている点からも推測可能である。いずれも幅は1m未溝であることから、前述の坪内または集落内の小区画溝に対応すると考えられる。当該河岸段丘上面で中世に碁盤目状の土地割りが形成されていたか否かは不明であるが、少なくとも一定の方位性と計画性に基づく土地利用が当該地でも指向されたと言え、このような土地利用形態が中世には少なくとも山間部の平坦地においても一般化していた可能性が指摘できる。（池見）

参考文献

- 山下平重他 2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 西打遺跡II』香川県教育委員会
川畠 聰 2001『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 松縄下所遺跡』高松市教育委員会
小川 賢 2000『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香西南西打遺跡』高松市教育委員会
大久保徹也 1990「下川津遺跡といっくる条里地割について」『鷹大大陸建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ 下川津遺跡』香川県教育委員会



第20図 古代末～中世における区画溝敷設状況事例

第6表 土器観察表

開拓番号	出土位置/層位名	器種	器種 (部位)	法量(cm)			調整		色調		胎土		構成
				口径	底径	器高	外面	内面	上：外表面 下：内表面	上：粗密 下：含有物など			
1	SD01/II層	土師質土器	坏	13.3	6.6	3.7	摩誠(回転ナダ少)	磨感(回転ナダ少)	7.5YR8/8黄橙 5YR7/8橙	密 1mm以下の長石、石英、赤色粒を含む	密 1mm以下の長石、石英、赤色粒を含む	良	
2	SD01/I～Ⅱ層	土師質土器	坏	—	(7.0)	(2.6)	回転ナダ少、 底部ヘラキリ	回転ナダ少	5YR8/8黄橙 5YR7/8橙	密 微砂粒、1mm以下の赤色粒を含む	密 1mm以下の長石、石英等を含む	良	
3	SD01/II層	須恵器	坏(口縁)	(15.4)	—	(3.3)	回転ナダ少	回転ナダ少	10Y7/1灰白～6/1灰 10Y7/1灰白～5/5灰	やや密 2mm以下の長石等の砂粒を含む	やや密 2mm以下の長石等の砂粒を含む	良	
4	SD01/II層	須恵器	壞(底部)	—	(7.9)	(2.2)	回転ナダ少、 底部ヘラキリ	回転ナダ少	5S/～N4/灰 7.5Y6/1～N5/灰	密 2mm以下の長石、石英等を含む	密 2mm以下の長石、石英等を含む	良	
5	SD01/II層	土師質土器	坏(底部)	—	(7.0)	(1.9)	回転ナダ少 (摩誠気味)	回転ナダ少 (摩誠気味)	10Y7/4にぶい、黄橙 7.5YR7/6橙	やや密 微細粒を含む	やや密 微細粒を含む	良	
6	SD01/II層	土師質土器	坏(口縁)	(11.1)	—	(1.5)	回転ナダ少	回転ナダ少	5YR6/6橙 5YR6/6橙	やや密 2mm以下の長石等の砂粒を含む	やや密 2mm以下の長石等の砂粒を含む	良	
7	SD01/II層	土師質土器	坏(底部)	—	(6.5)	(1.5)	回転ナダ少、 底部ヘラキリ	回転ナダ少	2.5YR5/6明赤褐 2.5YR5/6明赤褐	密 1～2mmの赤色粒、金雲母を含む	密 1～2mmの赤色粒、金雲母を含む	良	
8	SD01/II層	土師質土器	坏(底部)	—	(7.1)	(1.3)	回転ナダ少、 底部ヘラキリ	回転ナダ少	5YR6/6橙 5YR6/6橙	密 1mm以下の赤色粒、金雲母を含む	密 1mm以下の赤色粒、金雲母を含む	良	
9	SD01/II層	土師質土器	坏(底部)	—	6.5	(1.5)	回転ナダ少 (摩誠気味)	回転ナダ少 (摩誠気味)	5YR6/6橙 5YR6/6橙	密 1mm以下の赤色粒、金雲母を含む	密 1mm以下の赤色粒、金雲母を含む	良	
10	SD01/I～III層	土師質土器	坏(底部)	—	7.0	(1.4)	回転ナダ少、 底部ヘラキリ	回転ナダ少、 ナダ少	2.5YR5/6明赤褐 2.5YR5/6明赤褐	やや密 1～2mmの赤色粒、金雲母を含む	良好 やや密 1～2mmの赤色粒、金雲母を含む	良好	
11	SD01/II層	土師質土器	坏(口縁)	—	—	(2.5)	回転ナダ少	回転ナダ少	5YR6/6橙 2.5YR6/6橙	密 微砂粒、赤色粒含む	密 微砂粒、赤色粒含む	良	
12	SD01/II層	土師質土器	坏(口縁)	—	—	(3.0)	回転ナダ少	回転ナダ少	5YR6/6橙 2.5YR6/6橙	密 砂粒をほとんど含まない	密 砂粒をほとんど含まない	良	
13	SD01/II層	土師質土器	壞(口縁)	—	—	(1.4)	横ナダ少	横ナダ少	7.5YR7/6～6/6橙 7.5YR7/6～6/6橙	やや密 1mm以下の長石、石英等を含む	やや密 1mm以下の長石、石英等を含む	良	
15	SD01/II層	土師質土器	移動式壺	長幅(10.1)	短幅(9.5)	—	ナダ少、ハケ ナダ少、指頭痕	ナダ少、ハケ ナダ少、指頭痕	7.5YR7/4にぶい、橙 7.5YR7/6～7/6橙	やや粗 1～5mmの長石、石英を含む	やや粗 1～5mmの長石、石英を含む	良	
16	SD01/II層	須恵器	焼か(体部)	—	—	(5.2)	ナダ後格子目 タタキ	青海波状タタキ タタキ	N3/暗灰 N5/灰	密 2mm以下の長石等の砂粒を含む	良好 やや粗 2mm以下の長石等の砂粒を含む	良好	
17	SD01/I層	土師質土器	坏(口縁)	(33.5)	—	(1.8)	ヨコナダ少、ハ ケ、指頭痕	ヨコナダ少、ハ ケ、指頭痕	10YR8/3Cにぶい、黃褐色 10YR7/3C～5Cにぶい、黃褐色	やや粗 3mm以下の長石、石英等を含む	やや粗 3mm以下の長石、石英等を含む	良	
18	SD02	土師質土器	足釜(脚部)	長さ(6.5)	幅(2.1)	厚み2.1	ナダ少	ナダ少	10YR6/3Cにぶい、黃橙	やや粗 2mm以下の長石、石英、金雲母等を含む	やや粗 2mm以下の長石、石英、金雲母等を含む	良	
19	SD02	土師質土器	足釜(口縁)	—	—	(2.6)	ヨコナダ少	ヨコナダ少	7.5YR8/4浅黃橙 7.5YR8/4浅黃橙	やや粗 1～3mmの長石、石英を含む	やや粗 1～3mmの長石、石英を含む	良	
20	SD03	土師質土器	坏(口縁)	(9.9)	—	(2.3)	回転ナダ少	回転ナダ少	10YR8/4浅黃橙 10YR8/4浅黃橙	やや密 1mm以下の長石等の砂粒を含む	やや密 1mm以下の長石等の砂粒を含む	良	
21	SK05	土師質土器	坏(底部)	—	(8.2)	(0.7)	回転ナダ少	回転ナダ少	5YR6/6橙～5/6明赤褐 5YR6/6橙	密 1mm以下の微細粒、赤色粒、金雲母を含む	密 1mm以下の微細粒、赤色粒、金雲母を含む	良	
22	SK05	土師質土器	坏(底部)	—	(6.4)	(1.1)	回転ナダ少	回転ナダ少	5YR6/6橙 5YR6/6橙	密 1mm以下の微細粒、赤色粒、金雲母を含む	密 1mm以下の微細粒、赤色粒、金雲母を含む	良	
23	SP04	土師質土器	足釜(口縁)	—	—	(3.4)	回転ナダ少、 一部工具痕	回転ナダ少、 工具痕	10YR7/4にぶい、黃橙 10YR7/4にぶい、黃橙	やや粗 1～2mmの長石、赤色粒を含む	やや粗 1～2mmの長石、赤色粒を含む	良	
24	SP04	土師質土器	足釜(脚部)	—	—	(2.7)	ナダ少	ナダ少、ハケ	2.5YR5/6明赤褐～7.5YR6/4にぶい、黃橙 2.5YR5/8明赤褐～7.5YR6/4にぶい、黃橙	やや粗 3mm以下の長石、石英等を含む	やや粗 3mm以下の長石、石英等を含む	良	
25	SP16	土師質土器	皿	8.0	5.2	1.2	回転ナダ少、ナ デ少	回転ナダ少	7.5YR8/6浅黃橙 7.5YR8/6浅黃橙	密 1mm以下の長石、石英、赤色粒を含む	密 1mm以下の長石、石英、赤色粒を含む	良	
26	SK03	土師質土器	足釜(脚部)	—	—	(1.0)	ナダ少、ハケメ ナダ少、ハケメ	ナダ少、ハケメ	2.5YR8/6橙 2.5YR8/6橙	密 微砂粒を含む	密 微砂粒を含む	良	
27	SK03	土師質土器	足釜(脚部)	—	—	(11.2)	板ナダ少	板ナダ少	7.5YR5/4にぶい、褐 10YR6/4にぶい、黃橙	密 1mm以下の長石、石英、褐色粒を含む	密 1mm以下の長石、石英、褐色粒を含む	良	
28	遺構積石等	土師質土器	皿	(7.0)	5.2	1.3	回転ナダ少 (摩誠)	回転ナダ少 (摩誠)	7.5YR7/4にぶい、褐 10YR6/4にぶい、黃橙	密 1mm以下の長石等の微細粒を含む	密 1mm以下の長石等の微細粒を含む	良	
29	遺構積石等	土師質土器	皿	(7.2)	(5.5)	0.8	回転ナダ少 (摩誠氣味)	回転ナダ少 (摩誠氣味)	7.5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	やや密 1mm以下の石英、長石を含む	やや密 1mm以下の石英、長石を含む	良	
30	遺構積石等	土師質土器	足釜(脚部)	—	—	(2.9)	回転ナダ少、爪 痕	回転ナダ少	5YR5/6明赤褐 5YR5/6明赤褐	やや粗 1～2mmの石英、長石含む	やや粗 1～2mmの石英、長石含む	良好	

第7・8表 石器・鉄器観察表

開拓番号	出土位置/層位名	器種	素材	法量(cm)			重量(g)	法量(cm)			重量(g)				
				長さ	幅	厚さ		長さ	幅	厚さ					
31	遺構積石等	不明	チヌ(行)	2.0	1.3	0.2	0.4	14	SD01/II層	腐洋か	鉄	5.8	4.2	1.8	6.2

写 真 図 版



1. 調査区全景（北から）

写真図版 1



2. 調査地遠景（南から）



3. 調査地から阿讚山脈をのぞむ（北から）



4. SD01 検出状況（南東から）



5. SD01 畦 a 土層断面（南東から）



6. SD01 焼土検出状況（南から）



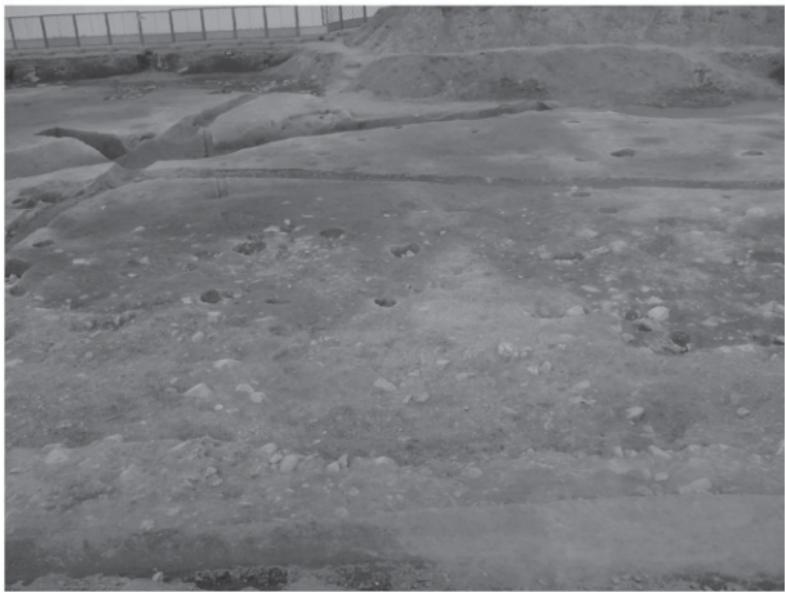
7. SD03 検出状況（南から）



8. SD02 検出状況（東から）



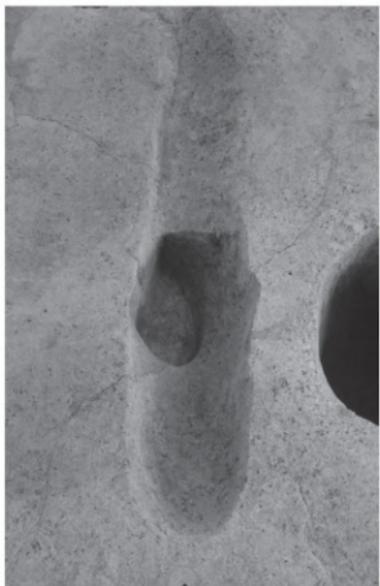
9. SD02 畦 e 土層断面（西から）



10. SB01 検出状況（西から）



11. SB02 検出状況（南から）



1 2 . SK01 検出状況（北から）



1 3 . SK02 検出状況（北から）



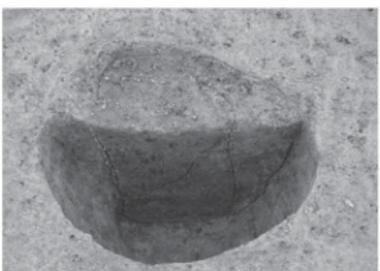
1 4 . SK04 検出状況（南から）



1 5 . SK05 検出状況（南東から）



1 6 . SB02-08 断面（南から）



1 7 . SP07 断面（南から）



2



15



1



3



14



4

18. 出土遺物

報告書抄録

塩江地区小・中学校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

西地遺跡

平成 26 年 3 月 31 日

編 集 / 発 行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷 藤田印刷株式会社
高松市北浜町 4 番 5 号